荒木貞夫の口述記録

――「シベリア出兵」について――

解題：兎　内　勇津流
校註：松　重　充　浩

本稿は，東洋文庫に保存されていた，荒木貞夫に関する資料群の一つで，表紙に「荒木貞夫氏との対談記録『シベリア出兵』」と記された手書き原稿を活字に起こし，理解を助ける註記を加えつつ，その歴史的位置付けについての解題を付したものである。

同史料の表紙を確認する限り，1957 年に当時東京都狛江市にあった荒木貞夫の自宅で聞き取り調査を行った際の記録に荒木自身が加筆修正を加えたものと推定される。また，他の今回「再発見」された荒木関係記録と照合して聞き取り調査の質問者は，当時，東洋文庫近代中国研究委員会の研究員であった衞藤瀋吉（1923–2007）氏と推定される。

しかし，聞き取り調査の目的やその経緯に関しては，衞藤氏が既に物故者となったこともあり，今のところ確定できない。その意味で，本記録は，史料批判が難しい，所謂「扱いづらい」記録と言えよう。それにも拘わらず，今回，本文の公開（註記・解題付き）に踏み切ったのは，同記録をこのまま放置し埋もれさせるのではなく，同記録を公開することで，同記録の不備を多数の人々による検討を通じて克服していくことに道を開くことこそ，様々な資料の保存と公開を社会的責務の一つとしている東洋文庫に相応しい仕事だと考えたからに他ならない。本稿が，斯様な克服過程の小さな一歩となることを願う次第である。

【記録原本の形態について】

用紙：200 字詰め縦書き原稿用紙（近代中国研究委員会製），ペン字手書き

凡例：・下線は加筆された文字，~~取り消し線~~は削除された文字を示す。

・［No.＊］は頁数を示す。

・文中の註は（　）内に示している。

・漢字は新字体のあるものは改めている。

本　文

［表紙］

荒木貞夫[1] 氏との対談記録

「シベリア出兵」

（加筆添削は荒木氏の自筆）

一九五七年十月四日

於都下狛江和泉荒木邸

［No.1］

「閣下がロシヤにおられました第一次大戦中にヨーロッパロシヤ出兵の問題がおこっておったようでございますけれども，私の見た本ではその時閣下が日本の本国に御献建策なされたというようなことを書いてございましたが。」

A.「なるほど。」

「一番最初にヨーロッパロシヤの出兵について本国に御献建策なされたのは何時頃なんでございましょう。」［No.2］

A.「さあーね。一寸時日~~事実~~は，はっきり分らんがな。調べれば何とか出てくるでしょうがね。ヨーロッパ大戦中のものはあちらの帙~~っち~~に入っている。大体役所は献建策記録保存していると思ったが，帰ってみると何処へ行ったか分らない。で，わしの手控えにしておったものが若干あるだけであとはまあ記憶によらなければならんが，大体大正五年だな，さかんにいっ~~れ~~てやったのは。それは砲兵が足りない，それから甚だ戦況が面白くない，と当時の［No.3］ロシヤはしきりと日本の増兵を第一線で要求する。日本の軍隊が来れば必ず勝つんだと。従って是非そういう風にしたいと。尤もそれについて中央の意見を直接には聞いて

おらんけれども私はそういう考であったこともこれは明らかです。

最初にロシヤが，ガリシャ[2]の一部を席巻した。これはまあ破竹の勢でいったわけだな，有名なペルムイスリの要塞[3]も一挙に突破してぐっと進んだところがそこで弾がなくなった。弾がない［No.4］というので彼等露将のが話をするにはそこで銃剱と弾との戦とな？（ママ）ったのだと。それで逐次又退却をはじめペルムイスリも棄て殆ど国境近くのカルパチア山脈にとどまったのだ。彼等が日本に向って最初に要望したのは小銃及び其弾であった。それから後にスミルノフ陸軍大臣[4]はその責任を問はれている位である。つまり平素の準備が充分でなかったということになる。それっきり戦線は動かない。これは本野大使[5]の話だが日本が当時三四今十万の小銃と二百万発の及び小銃弾を送ってくれれば樺太の北［No.5］部はさしあげると迄云い出すに至り，本野さんも非常に乗気になった。それは太平組合[6]がひきうけることになったが前金を半分よこせとか，何かいうようなことでゴタゴタしている間に英仏の工業動員が出来，英国から火砲なんか来るようになってしまい，たしかそれはそのまゝになってしまったんじゃないかと思う。あるいは，一部行ったかもしれません。一部は行ったろう，そういう時なんだ，連合国だから是非出してくれとこういうことだっ［No.6］たんだなこゝで国際義務からも我国は一はだ脱ぐべきだったと思ふ」。4（ママ）

「革命の直前に第二回目の出兵の献建策をされたということがやはり本の中に書かれてあるわけでございますけれど，これは第一回目の献建策とかなり性格が違ったものでございましたか，或は同じようなものでございましたか。」

A.「それは連繋はあるけれども，第二回の時にはロシヤがせっぱつまっている時であるんだから，これに対して充分に援助もして［No.7］やらなければ結局連合軍の勝敗の分れ目になるというような意味もあった。その時には具体的に案を考えて国隊内の大砲なんか，どうせ戦後火砲等というものは時代おあくれになるから現在持っている火砲は全部出し使ってもいい，でありったけの大砲（一字削除）を出してしまえ，といってやった。当時連合軍はどこにも戦勝のめどはないんだから，そうして援助をしてやれば必ず突破出来る，突破出来れば彼等はそれでもって日本に感謝する。かねがねどういう風になるかわから［No.8］んと思はれ

ていた日露の関係というものも，これによって或は手が握れるようになるかもしれん。この機会に，ロシヤをおさえようということだけが武力じゃない，彼が東洋に対する理解をもってくれればよい。それによって，日本と手を握るということになればよい，私が身を軍籍に投じた目的もこれで達するこういうふうに考へての献策であっ~~ことで出し~~た。たゞ損害をそのため多く受けるということにならぬ様に考へなければならぬ此事は~~ると~~，~~これは~~戦争には非常に考うべき問題です。多くの損害を受け多くの血を流すということは決して~~これは~~武功に［No.9］はならないそれは孫子あたりもそう言っている即ち戦はずして敵の兵を屈する換言すれば血を見ずして敵を屈することが最上なのである。それで考えたのがありったけの砲兵を援助として送ることであった砲兵ハ当時比較的損害の少い兵種であったのだ。ありったけの砲兵といっても当時計算して見ると三百六，七十門です。それに軍司令官をつけてやればいい。それから下級の将官だと露軍の一部のものゝ指揮下に入れられる~~向うの軍につかわれる~~。だから優秀な，有力な位置のある人がよい。実は当時，イタリーで相当修業したことのある砲兵の長老に山口勝中将[7]という人がいた。これは国際的には頭はあるし，イタリー語は上手だし，たしかフランス語も~~若干~~やったろうと思うし，その人を［No.10］頭において砲兵軍というものを作り，それに援護をする歩平三箇旅団をつける。これは砲兵が危機に頻（ママ）する場の援護のためで，平生は第一線に出さない。そうすれば比較的損害も少いのではないか。取り敢へず二大会戦にそれが参加すれば必ずロシア方面の戦況は挽回する露西亜は日本に感謝する万事好都合だ。こういうことで相当具体的に進言し戦後の砲兵補充のことも考への中に入れて置て~~やってからあとの兵器の補充も考えればよい~~。当時の金で約五億となる切りつめれば二三億でもよいそこまで計算はやっています。もう一つ第三回の出兵策が~~あ~~あるんですが，第二回はこういうこと［No.11］であった。」

「でその場合，列国特にアメリカの態度が，第一回の献~~建~~策と第二回の献建策の時とでは，違っておりましたでしょうか。つまりフランス大使[8]が~~フランシス大使が~~革命の直前，すなわち一七年の九月の頃には日本の出兵に賛成したと書かれてあるのを読んだことがあります。ところがシベリア出兵の時になりますと，アメリカはかなり日本に反対してい

る，そういう経過です。アメリカの動きというものはロシヤにおられ［No.12］た時（一字削除）お分りになりましたでしょうか。

A.「アメリカは当時何というのかな，次等（？）（ママ）の価値しか持っていない。兵隊も僅かしか出してない。何師団出しましたか。二箇師団も出したか或は三箇師団出したくらいでしょう。だからあそこの勝敗の決はアメリカではとれない。アメリカ軍は，フランス方面に行った。殊にフランス人にきいてみると，アメリカの兵隊が来て困ったという。計画性が一つもない。一例を云うと，アメリカに配［No.13］当された地域では，後からの補充に計画性を持たんから，今すぐにいるものも後でいるものもメチャクチャに機械力によってダーと出してしまった。第一線で非常に激戦になって弾がいる時，弾が後の方にある。後から前へ送ろうと思うと自動車で道を全部ふさいじゃってどうにもこうにも仕様がなかったと。そこでフランスに対してフランス軍で何とかしてくれといってくる。そうかというんで，フランスの方ではその自動車を全部畠の中にほ［No.14］うり出しちゃった。全部道路を綺麗にしてそうして往復多くの行程を合理的に作ってやったと，まあこんな風で非常に寧ろ迷惑だというような事をフランスの将校が話しておった。我々の正面にはいなかったから，アメリカはどうもというようなことであった程度で，あまりアメリカの問題は注意していなかったが，アメリカも当時はやはり日本が連合軍として出兵するということに対しては責任もあるから歓迎しておったろうと思う。外交接衝の方は後できかない［No.15］が内地でやっておったと思う。充分にはきいておらない。」

「閣下の御献建策に対して山県元帥[9]　翰が大分反対であったというようなことのために，それがつぶれたというようなことが書かれてあるのを読んだことがあるわけでございますけれども，その山県元帥翰の反対というのは，山県元帥翰個人の考が非常に強かったわけでございましょうか。」

A.「えー，当時は元老として一切を支配［No.16］しておったのは山県さんで殊に戦時中は政治関係もそうだった。そこでこれは後から知ったことでその時は分らなかったことだが，山県元帥翰の考へは根本に於てから返事がなかったのは，日本の今と同じです。つまり日本の国軍は自衛の国軍だから海外には出さない。たかだかだしてザ・バイカル以東

ならばともかくも，それ以上に兵を出さないときめられて，そういうような献建策には同意をしなかったという。のみならずわしらのそういうような電報を山県さんには見せ［No.17］られないというのであった。もし見せると山県さんが怒るから君の電報は殆ど山県さんには見せられなかったと，こういうことを云って相当皆不平であった位な頭の懸隔が両方にあった。第一線で見た日本と，国内でもって安閑として金もうけをしておった頭との間に相違があるとこういう風に考えられる。それからそれに関聯するけれども当時即ちレニン政権獲得[10]の前後ロシヤの大使をしておったのは内田康哉[11]さんです。本野一郎さんのあと内田さんです。内田さんにこ［No.18］の出兵論をもっていって話をしたところが，内田さんは，列国がどうせ疲弊する。その時に傷つかざる武力をもって戦後の発言権をもって国際場裡に進むことが非常にいいというんです。これも，国力温存案であったが，私はそれは違う，この戦で世界が大変化するということを考えねばならんといった。その時に大戦の体験をしておらない国民は何も理解出来ないで必ず戦後立ち遅れをする。ちょうど寒稽古の時と同じです。寒稽古は寒いから［No.19］馬鹿馬鹿しい。ふところ手をして道場に行って人のやるのを見てあれは分った，これは分ったで果して進歩しましょうか。結局本当の場合になれば，あそこで血みどろになり風邪も引き怪我もする位にして始めて寒稽古の後に役に立つんじゃないか，とこういう議論をして内田さんと相当争ったことがある位で，内田さんは出兵論には反対で，武力温存，つまり国力温存主義で戦後世界各国の疲弊に乗じて発言しようという意志だった。おそらく内地でもそう［No.20］いう頭が多かったんじゃないでしょうか。」

「内田さんとお争いになったというのは十一月革命の後でございましょうか。」

A.「まだ前だろう。~~本野さんが帰ってないときか，~~よく覚えとらんけれども，無論今のやうな問題だからレニンの革命前と思うとるが。」

「もう一つ，第三回目の出兵の御献建策というのを私は全然知らなかったのですけれども，それは何時頃でございましょう。」

A.「それはね，一寸はっきり今覚えない［No.21］が，~~ケレンスキー革命前かケレンスキー革命後かどっちかです~~。レーニン革命前です。た

しかそう思うとるがな。あっちの革命というのは我々あまり驚かなかった。最初即ち第一革命は何も思想革命じゃないんだ。ケレンスキー革命[12]から以後社会革命の様相を帯びて来たあやしく考えて来たのだ。出兵論は其時から真剣に（以下削除し忘れか）だからレーニなって研究したのだン革命の前かも知れん。第一次革命の後，つまり三月と六月の間位だな，だと思うとるが一寸，これはその書類を見たら何か出てくるかもしれんけれど。」［No.22］

「十一月革命の前にはそれでは出兵の献建策はされなかったわけでございますか。」

A.「いや十一月革命前即ちケレンスキー時代に盛んに意見を述べたのだそいつが一寸，今のやつがね，十一月革命前といえばケレンスキー時代だからね。

「十一月革命の直前でございますね。」

A.「そうなのだれ一寸今云ったやつは分らんがね。それはこういう案なんだ，相当ロシヤが崩壊を始める前提があらわれた。これは下手をやるとロシヤが武（一字削除）器を棄てるかも知れん。連合国のあの大国がなくなっちゃうと連合国が［No.23］困ると。そこで向うの第一線で相当要望したのが日本の出兵なのだ。非常に日本を買い披っているから赤い帽子が一つ出てきさえすればそれでもうロシヤが助かるんだと。だから出してくれと。ところが当時はもう非常に混乱しておったんでね，ただじゃあいけないということになった。でその時は一口に云えばだね，背後をアルハンゲルスク[13]，ムルマンスク[14]にとる。そうしてほんの僅かの兵隊で。というのは一師団かそこらも出しゃいいだろう［No.24］と思うが，それを出してもし具合が悪ければだな，だからケレンスキー革命以後です。具合が悪ければ逐次アルハンゲリスクの方，つまり北に向って退却をやるようにして，左をウラルに託して南面して進退する，それに孤立して退路がなくならないようにするのだアルハンゲリスクにハ米国を主とする連合軍の海路基地があるから万一の場合でも安全であるウラルム，そうして逐次この，こういう線からこう廻ってこう退って行けど，この献建案をしておった。よくこっちへ来てひやかされたことだが，ウラルを左翼にして大きな転回をしてそうしてアルハンゲリスク及ムルマンスクへ行く君の案は一つ話みたいなような話だね，［No.25］

等と云われたことがある。しかしあっちにおってみればそれ位出せばレーニン革命には至らなかったろうと思うんだけれども，小さな気附の国内の政治家も軍部も唯安易を希ふて大事を逸したのだだ~~からケレンスキー時代かもしれん（一字削除）~~。

「田中参謀次長が，かなり出兵には熱意を持っていたという事と，それから本野外相が非常に強硬な出兵論であったということをお伺いしているわけなんですが，その両者の間に連絡はあったんでしょうか。」

A.「それは無論政界としてあったろうと［No.26］思うけれども我々の方には分らんな，第一線の向うにおった時には。本野さんの出兵論は一番最初の北樺太を日本に譲渡することから来ておる。殆ど出来かかっておったのだ。それが頭に残っておるから今ここで以って積極的に日本がやれば北樺太は必ずソ聯が譲ると，こういう頭が強かった。最後までそうだったでしょう。出兵論に対しては。

「閣下はレーニンが政権をとった以後，満洲にお帰りになる前に大体何処においでにな［No.27］ったんでしょうか。」

A.「わしは戦線におった。戦線はルーマニヤ境です，ヤッシ[16]におった。ルーマニヤが殆どヤッケンゼン[15]の~~に~~一撃に敗北して~~の下にずっとやられて~~ルーマニヤの北部ヤッシの一劃―ルーマニヤの領土の五分の一位あるかな―その領土の中に皇帝も何も逃げ込んできてそこにおったです。その時がもう恰度第一次革命の時なんです~~革命の時なんだ~~。」

「満洲里に帰られましてからハルビンにお出でになって中島少将[17]の指揮の下に入られた［No.28］ということをおききしたわけですけれども，それから日本に帰るまでの間は何かお仕事をされたわけですか。」

A.「それはね，向うから帰ってきた時にはレーニンが天下をとって単独講和に入りそうだった。もう戦をやめるということになったから，それじゃあ，あそこにおっても連合国として役に立たないと，そこで引上げ命令が出たのだ。無論軍服のままだった。一緒に帰ってきたのが黒木大尉[18]だった。これはどう［No.29］帰れるかどうか分らんで，東の方は我々がその露払いをしようということになった。それから北の方にいった一団，又瑞典~~スイダン（？）~~方面に行った一団がおる。たしか三つかに分れて引揚げることになった。あの間は大したことなしに帰った。相当こちらは腹をきめて殆どけんかを覚悟して帰ったがこの間のスケッ

チがあるような次第でね。そうして帰ってきて途中で満洲里にきてあそこで検査をしきりとするので始めてそこにセメノフ[19]が一大尉とし［No.30］て反共の旗をあげていることを知った。目下有力者二十五名，中には将官もおり，従ってこの国境は自分が監視（一字削除）をしておるという。国境を検査して金なんど取り上げたり何かしておるが我々には非常に好意をもってきた。あゝそうかと始めてこゝでシベリアの情勢が分った。そのまゝハルビンに到着すると，内地からしばらくそこにとまって，中島少将の指揮を受けよ，ということであそこにとまった。それからしばらくおるうちに一応報告せいと［No.31］いうんだった。セメノフの問題を知っているかと云うんで，こういうことであるという話をしたら一応帰って来いということになった。何月かね，四月か五月頃，こちらは後藤新平[20]氏が外務大臣の時だった。」

「本野外相でなくして後藤新平氏が外務大臣の時でございますか。」

A.「その時は本野さんがもう亡くなって・・・病気でやめておって間もなく亡くなったでしょう。だから後藤新平の時帰ってきた。」［No.32］

「四月三日に日本の第一次の出兵決定があったということをこの前閣下からお伺いしたわけです。ちょうどその時にホルヴァート[21]がけっ起するのに承諾を与えたというような話をおききしたわけですが，それはまだ日本にお帰りになる前でございましたでしょうか。」

A.「~~いや~~帰る前と思うがね，」~~或は二度帰っておるかもしれん。家の奴にきけば分るが~~。」

「後藤氏の外務大臣になったのは四月の末でございますね。」［No.33］

A.「そう四月末から九月までだだから私の帰って来たのハ五月の初めかな」~~A.「それじゃあ二回目に帰ってきた時だな。」~~

「閣下がハルビンにお帰りになった後，セメノフとの間に何か御関係がございましたでしょうか。或はホルヴァートとの間の御関係の事をおき聴きしたいのですが。」

A.「当時は中島少将が担任で主任であった。無論参謀次長だった田中さんの考だが大体の方針はだね，日本としてはホルヴァートあそこにつまり反共政権をこしらえてその要［No.34］望に応じて出兵したいという頭であったらしい。そこで向うにそういうものを作らにゃならん。その物色をして，いろんな人があったが，何といってもホルヴァートが

十年も東支鉄道の長官をしておるし，相当年輩でもあり，~~当時の~~閲歴もあるから，それでホルヴァートに向って中島さんが盛に慫慂したわけだ。でホルヴァートはいやなんです。いやなのをとうとうやるということに決定をして返事をしたのが四月の二日頃~~だったか何時か知らんけれ~~［No.35］~~ど~~四月三日の神武天皇祭の日に~~に~~いよいよそれが決定したと。わが任終れりというわけで中島さんがシャンパンをあげて飲んだんだ。そうしたらホルヴァートは又腰をおろしちゃった。ホルヴァートの云うのは無理はない。俺が起ったって，しかもこれは外国の土地だと。起ったってすぐつぶ~~遣~~されちゃうのだ。何も武力を持ってないんだ。そこでセメノフのことだが，軍隊をお前の下につけたらいいじゃないかと，まあこういうことの話になって，セメノフもいやいやそういう［No.36］頭をもっておったけれども，ホルヴァートとしてはセメノフと合はないし，セメノフは新鋭どっちかというと革新気分，ホルヴァートは保守系の爺さんだろう。そこでなかなか合はない点もあった。そこで彼は日本から早くハルビンに兵を出してくれ，そうすればすぐ起~~立~~つと云うのだ。彼の将来の責任の回避だね，どうなるか分らない時に，俺がやったんじゃない，日本がいて強要して俺が起~~立~~ったんだということを云いたい。日本政府は反対にホルヴァー［No.37］トが出せと云ったからこっちはやむを得ず彼を援助するため出すんだ。こういう臆病者が両方よっての細工と私は判断する。そこで当時笑ったのだが，真暗や闇みに臆病者が刀を抜いてヤッと云ってへっぴり腰で刀をふり廻しているのだから，何時まで経ったって之は決定しないんだと，こう実は云った事があるんだ，そういう時だったんだな。」

「では次に中島少将と武藤少将[22]が交代された時期の問題なんでございますが，閣下が中［No.38］島少将の下におられた時から今度武藤少将の方に代られたその事情について一寸お話し願いたい。」

A.「丁度シベリア出兵の後だった。僕は中央におらなかったから分らんが，第一線ではこういうことであったろうと思う。全部で三箇師団出したでしょう。ザ・バイカルには大庭中将の率いる第三師団が出た。日本の政府，政府というより寧ろ軍部としてはまだ交戦中―戦争中―だから，何時露西亜~~彼ら~~が寝返りする［No.39］かも分らない。又たくさんの捕虜を解放するとなると，そいつがどうなるか分らない，その他，

腹の中では何か考えていたかも知れないがそれは僕が忖度するよりか仕方がないので，云えば悪口や何かになるから，それはしばらく措おいてねなね。そこであそこに軍を編成して，さあ来いと，西から攻めて来るなら何時でも来いという本当の軍事体制をとりたかった。ウラジオ派遣軍[23]とは別であった。余り日本に同意しないアメリカの制約の下にウラ［No.40］ジオ派遣軍が出来たので，それとは又独立した部隊にするのだというのであった。あそこに一軍をつくって軍司令官をつければ何か出来るでしょうまう。その参謀長に当時の武藤少将がなることになった。それで中島少将はウラジオ派遣軍の参謀に代って行ったわけだ。」

「実は私の見ました記録によりますと，中島少将が六月十七日に日本に帰還しておられるわけなんでございます。でその前に武藤少将は既にハルビンの方に来ていられるようで［No.41］中島少将からの報告と武藤少將からの報告がだぶって来ているようで，武藤少将は一体何時頃ハルビンに来られたのですか。」

A.「さあ。日は一寸分らない。調べればすぐ分るのだが。武藤少将があそこに行ったのは軍司令部の編成の準備のためだったから七月頃かな。」

「少し前に戻るわけですけれど，閣下が日本にお帰りになった時にいろいろの方と御会見なさっていられるようでございますけれど，例えば後藤（一字削除）外相とか田中参謀次長，乃内至寺内[24]［No.42］首相などとお会いになったと致しましたらどんな話の具合だったんでしょうか。」

A.「寺内大臣とは会っておりません。向うから帰ってからの挨拶には行ったろう。それから田中さんは当時参謀次長だからそして其九月に陸軍大臣になっている，どうせ欧州に従軍した向うに行った関係でこれを報告しなければならなかった。それから後藤さんに会ったのは，たしか田中—当時まだ参謀次長ですが—さんから後藤に会［No.43］ってくれと云ったんじゃないかと思う，よく記憶しておらんが。そんなことで後藤氏に会うたのだ。別に後藤氏に対する印象もなし。余り云っちゃ悪いけれどもね，相当な人を喰って居るからなんだからね。たいした口もきいてないで飽きると直きに居眠りの風をしてね，人を帰すんだよ。何の印象も残らん。それから当時田中さんは相当中心で非常な策謀の頭を

持っていたということだけは感じられる。それで僕等に向ってしきりとセメノフの事をきいて，要するにセメノフをも盛りたてて行けと云う。でないとホルヴァートが駄目だからね。もりたてようという［No.44］そして手のこんだ謀略もあったあとで其内容を探知してその案には相当僕は腹立てたことがありますよ。あまりそんなことを素破はぬく必要もないだろうけれども。」

「大正七（横に「？」上側欄外に「~~七年は後貝加尓に視察した時であろう~~」）年六月二十五日に閣下が北満一帯の視察を終えて満洲里に着かれたということだけは私の読んだ本に書かれてありました。北満一帯の視察の時の模様について簡単にお話を願います。」

A.「それはね，我輩がね，シベリア出兵に対しては名分が正しくたたない，やり方も［No.45］一貫しておらんと，ギャンギャン向うへ云ったもんだ。で，向うの指令は終始変るんだ。そこん中に多分しまってあるだろうと思うんだが，こちらでもってそれを纏めてこういうふうに解釈するが之でやっていいかというようなものを書いて内地~~向う~~に送ったことがある。たしかこの書きものはあります。そこでその通りやれというから~~ういうことになったから~~ギャンギャン意見を上司に出した~~云ったものだ~~。それは私が自分の一生の仕事を即ち対露問題解決を懸命にやり~~していくという以上~~，ロシヤの東漸を停止せしむる［No.46］というのが僕の仕事としていたから~~任務なんだ~~。それで軍隊に身を投じたのもそのため~~行ったのもそれ~~なんだ。ロシヤの問題を片付けさえすれバ軍人としての僕の任務が終るんだと考へたのだ~~るのでなければ何も軍籍に身を置か（一字削除）なくていいわけなんだ~~。元来三国干渉によって発憤して軍籍に身をおいて眺めたのはロシヤだけだ。ロシヤの東（一字削除）漸を何らかの方法で平和方法でも良し何でもいいから露国に東漸を~~これは~~あきらめさせなければならないと考へての事であったから身分なぞは考へない一途に露西亜。—（以下，削除し忘れか）そこであの問題がうまく解決革命後の此好機を以て之れを解決し様（ママ）と心身を砕いて努力したのだ私は従軍したのハ少佐で中佐時代は欧洲戦場で過し西伯利事変中に~~すればそうなるんだから，そこで相当こちらも力をいれた。あそこで中佐から~~大佐になっ［No.47］たんで中佐でハ内地で勤務ハしない~~だがそんなことは眼中にない~~。全力をあげて，以上の様な解決に~~そこに~~もっ

て行こうと考えたが，上のものはそう考えておらんから僕らがそんな事を考えたって余計な事だと思うたかもしれん。そこで相当何処へでもつっかゝったですね。これはまあ後のエピソードになるがね。今考えるとまだ若か悪~~か~~ったと思うことがたくさんあるんだ。この問題はエピソードだから話にならんが面白ければ後で話してよい~~やる~~がね。それで喧しく云ったものだから，内地では荒木は神経［No.48］衰弱になったという評が出たそうだ。それは私知らない。たまたま田中さんが代った後，参謀次長になったのは福田雅太郎[25]中将だった。私も知っておる人です。荒木が神経衰弱になったから内地に還そうという話が出ておった。そこで自分が一つ行ってみようというので出てきてそして僕に一つずっと廻ろうじゃないか一緒に来いというわけでずっとシベリアをシベリアというよりザ・バイカル以東だな，ずっと汽車で廻ったのがその時なんだ。で終［No.49］ってから福田さんが実はこうこうこういうわけだ。一緒に歩いて君，別に神経衰弱になってないようだが，続けてやるかどうするかというから，私の意見をいれて下さるならやりましょう，いれないなら居ったってたゞ両方の感情を悪くするばかりで結局ハ失敗に終るからと~~だからと~~云った。それじゃあ君居り給へ。帰ったらそういう手続をとると云ったが，福田さんが帰る前に人事は~~と~~すでに決定しておったからというので，それからすぐに熊本の聯隊長に行ったわけだ。まあ追っ［No.50］とばされたわけだろうな。（哄笑）

「かなり前に戻るわけなんですけれど，グローデコヴォ宣言[26]が七月九日に出ているわけでございますね。グローデコヴォ宣言の前に閣（一字削除）下は既にホルヴァートの機関長になっていられたわけでございますか。」

A.「中央の後貝加爾軍編成計画が失敗に終った結果，~~今のようにして武藤機関というものが軍の編成をとりやめた。~~まあこれはアメリカがこわかったわけだな。~~そこで~~武藤さんは軍参謀長となるのをやめて単にチタの第三師団司［No.51］令部付としてチタの第三師団司令部に行くことになり~~あそこに残ると~~，中島さんは既にウラジオストックに行っておるね。派遣軍の参謀で行っている。その時に僕一人が残された。~~ホルヴァートの今までやった~~そこでホルヴァート政権というものの樹立に向ってお前やれというわけでホルヴァート機関として残った。たまたま

浦塩には連合軍の出兵が明となり形勢は強化したので~~もしているというので~~彼は遂に決心をした。が国外即ちハルビンで政府~~で~~宣言をすると国際法的にいろいろ故障が出るからとて，~~国内では駄目だからと思っていた。彼ももう安心したわけだ。~~グローデコヴォ即ち露領の第一停車場まで出ると汽車を停めてそうし［No.52］てあそこで政府の宣言をしたわけだ。」

「公式の出兵は八月になってからというふうに記録にはあるわけなんでございますが，チェッコスロヴァキア事件[27]が起こりました後，日本の出兵宣言，アメリカの出兵宣言は夫々八月二日三日になされるわけでございます。でその前にすでにグロデコヴォ宣言が出ているわけでございますけれども。」

A.「グロデコウォ（ママ）宣言が七月九日なれバ一ヶ月許り~~それはどっちかが問題だね。~~グロデコヴオにいていろいろな準備をしたのであろうそこで連合軍も浦塩に到着したので~~で宣言をしてすぐに~~ウラジオに行こう［No.53］とした時，グローデコヴォの次の~~もっと~~東の停車場でしたか，そこでチェックの装甲車とホルワットの装甲車が衝突せんとばかりになっておるから，これはまあ出兵しておったことは確かでグローデコヴォ宣言直後にそれが起っているのだが或ハ宣言より浦塩進入企図までの間に一ヶ月位あったのかも（以下，削除し忘れか）出兵はその前にあったろうと思知れない往復電報を見れバ直ぐ分る~~う。~~」

「デルベル[28]と米国との関係の問題なんですけれども，日本海軍は比較的デルベル支持に傾いて三笠艦上にデルベルの司令部が設けられたということをききました。それとは別に［No.54］アメリカがかなりデルベルと関係をもっていたような記事をみたことがあります。そういう事情はお分りになりませんでしょうか。」

A.「分らんね。デルベルはオムスク[29]の主権者であそこでクーデターを喰ってデートリックス[30]か誰かしらんがその後をとられて亡命をしてきた。偶然わしがハルビンに居った時，彼は亡命の途中訪ねてきたです。会うたです。~~その時に彼は自由です。~~相当よく喋るし頭も廻るようだった。せの小さい風采の上らん男でS.L~~R.~~でし［No.55］たろう，たしか。~~社会革命，革命じゃない社会民主かな，どっちかな，~~社会革命党[31]の右派だったかな。S.D.が左派だから，S.R.右派です，~~右派の人~~

~~問です。~~そして自分はもう~~知らん（？）から~~欧洲に帰るといってハルビンを通過して行ったのですそれ~~やつ~~をウラジオで~~もって~~加藤寛治[32] 浦塩派遣海軍司令官~~さん~~が招いて軍艦内に政府を作らせたのです~~捕かまえたのだろうと思う~~。デルベルはまあそういうことで浦塩に止まった~~だな~~。」

「三笠艦上で閣下とそれから加藤閣下とが論争されました後のホルヴァートの動きにつ［No.56］いてこの前一寸お伺いしたんですけれども，もう少しお話し願いたいんです。」

A.「今のグロデコヴォ宣言の後，当然ウラジオストックにはスムースに入ってあそこでホルヴァート政府が出来て極東の代表政府になるとばかり思っていたが，グロデコヴォを汽車で出発するとチェッコの装甲車が次の停車場に~~が~~来てホルワットを浦塩にいれないという。チェッコも日本の援助を受けているんじゃないか。ホルヴァート政府もうけておるのだ。何事かというので私はウラジオにとびこんで行った。武田[33]少佐と二人［No.57］です。そこで領事館に浦塩の有力な皆に集ってもらうとその時に陸軍からは前から坂部[34]~~という~~大佐が浦塩に行っておったし，それらと菊地（ママ）総領事[35]と会ってそして会議をした。ところがどうしてもチェッコスロバキヤ援助だから，他の事には手を出さないということばかり云っている。訳が分らない。それでその会議はそれで終ってしまって，後で坂部大佐に，一体どういうんだ，分らんじゃないか，君も陸軍におるんだから分っているだろうと云ったところが，まあそれは加藤さんがどう［No.58］してもきかないんだ，だからすべてスムースにやろうとするんなら加藤さんを説くよりか仕方がないという。よし，それでは明日加藤さんを訪ねようというので坂部と私と二人で旗艦だった三笠艦に訪ねた。加藤さんは田中さんとはロシヤ駐在以来相容れない。性格が違うんです。でいきなり加藤さんは冒頭から僕を見て，なんだ田中の走狗かいと云った。加藤さんらしい言分なんだ。僕は田中さんと意見が合はないですよ。シベリア事変だって根本から合［No.59］はない。けれどやれというからまあ其の中で日本の将来を誤まらない様にやるだけの話であるとやり返した。~~従って之は出来るだけ間違はないようにしにゃならんと思うだけで，采配をふっているだけだと思うとったですけれど。それからちょっとムッとしたからね。~~そうして

田中の走狗だと云った後に，何だ今頃ホルヴァートみたいに旧保守系のものをひっぱり出したって問題にはならない，もうこういう状態になってきたらどうしても左翼のものをひっぱり出さなきゃいけない，それでデルベルが［No.60］革新派であるからこういうものをとらなきゃいけないんだとこういうことが話にでた。そこで私はデルベルに会うている，それは別な話なのだと云った。政府からの司令もあること自分の我まゝを通そうといふべきでハない尚~~それから~~対ソ問題に対しての意見はいろいろあろうけれども対ソ問題なら私も個人の意見を持っており政府の意見とも違う。今日は対ソ問題の論争に来たのじゃないんだ，今直面しているものをどう善処するがいいかということに来たんですと，こういうまあ話をした。そうしたら~~まあ~~相当馬鹿にしておっ［No.61］てね，最初から田中の走狗かという位だから。君~~あなた~~は大佐が大切なの~~ほしい~~だろうとか何とかいやな冷かしをした。加藤さんは口が悪いからね。あー，僕はもう腹が立ったから軍服をぬぎすてちゃって放り出してワイシャツだけでもって，わしはそんなことで来ているのではない，裸で~~それで~~わしの意見も云おう，之はわしの意見だ，政府の意見ではないんだ，一体シベリア事変ではどっちもこっちも間違っている，でたらめなんだ，聯合国に対してロシア―もう［No.62］ソ聯になっているが―は条約違反をしているのだ，単独講和はせずと約束しているに拘らず，彼は単独講和をしたのだ，堂々と責~~攻~~めたらいいじゃないか，単独講和をした以上はまだドイツは滅びていない時だから危険である。敵につくかもしれん，我国は之に対する準備をするのだ。それで東洋だけは日本の手で平静を保つという主旨でもって兵を出せばよいそうすれば自主的に進退することが出来る拘束は受けない~~すにしても実際はどこまで出したっていいじゃないか~~，ザ・バイカルまででも満洲里まででもどこでもいい。それで［No.63］これだけの治安は日本の範囲だと云へばどこの国も抗議する理由が~~にもいいようが~~ないではないですか，のみならず列国は日本がそういうことをやってくれることは実は望んでいるのではないか。まだドイツが盛んな時であるから，それがレーニンの天下に響きレーニン政府が没落してもう一回戦線回復ということになればいいんだろう。こっちはそう考えているが，しかしそれはそれで別の議論だ。まあ田中さんのやり方のいい悪いは別としてホルヴァートを立てよとこ［No.64］

ういうことだから自分はホルヴァートをたてたのだ。ホルヴァートはが弱く，腰抜けだが弱かったがく漸く立ち上った所にこういう妨害なのだ。何事ですかとそれは相当語気も強かった。相当腹立っておったもんだから坂部君をそこにおいて，坂部は一体こういうことを知って何をしておったのだというような事位云ったてやった。そう云ったところが，加藤さんは一体田中さんの意見とは終始自分は合はないんだと云ったあげく今度は，和かになって今服をぬいでそう云ったら分った，［No.65］その意気だ，しっかりやれ，なんて又はっぱをかけて来たた（ママ）わけだね，次にそうして俺の方には誰でもいいからここで政府をつくれと指令がきている。今のような自分の意見でデルベルのような革新派がいいと思うたから，自分は支（一字削除）援してここに政府が出来ているのだと云った。これは不思議だ，私の方はそうでないんだ，ホルヴァートと云ってきているんだ。わしはそのために唯一人残ってホルヴァート機関として残ったんだ，幸いに今グローデコヴォで［No.66］宣言したんじゃないか，閣僚も決っている，閣僚も相当な前の閣僚の手であいもおるんだ，そこらの馬の骨を拾ってきておるんじゃないと話したら今のような返事だからそれはもう不思議だ，それじゃ今ここで議論してもしょうがないから両方で本国に一つ電報を打ちましょう，どっちが本当なんだと云ってお互に分れた。それが第一回なんだ，それからすぐに電報をうって返事を待った――どういった返事かその中にどっかあるだろうと思うが。［No.67］返事が来てみると，まあ貴官に訓令した通りと来ている。あーよし，明日はうんと，とっちめてやろうと思って，そいつを持って再び加藤さんを訪ねた，加藤さんは俺の所にも同（二字削除）じ様な返事が（一字削除）来ているというわけなんだ。そこでそんな馬鹿馬鹿しいことがあるものですか，もう私やめました，もうこんなくだらない事ならばこの事に我々が血道をあげるのが間違っているから，それじゃあやめましょう，私も腹をきめ（一字削除）ました。さよならと言ってそのまゝ引揚［No.68］げた。でグロデコヴォに帰る途中ホルヴァートとチェッコと向いあっている所に来た。そこで両方におみやげをもってきて両方に日本が援助しているんだと云ってなだめて事なく分れさしたた。こう今でも考へさすが斯様な時にはいうことが必要なんだ，煙草とかチョコレートとか買ってきてね，両方が一つの停車場にこうやって大

砲を向け合っておる間に入って先づ砲口を側面に外らして落つけさせ菓子煙草を両方の間に出してったんだ，これをこうやらしておいてはいけないというので帰る時両方を集めて，日本が両方を援助しているんで喧嘩してくれるなとなだめるのだ事ハ自ら平穏にすむたのだ。そ［No.69］れでやっと別れた。グロデコヴォに帰ると間もなく僕はホルワット機関の事務を領事に引渡し次で今度はウラジオ派遣軍の参謀に代って反共軍の編成及政府の助長に力を入れることになったた。それでホルヴァートの方は放りぱなし後どうなったか。確か領事が今度は僕のところに来た。ここまで来た以上は後は一切外交官に任せた，お前はその機関の仕事はよろしいということでウラジオ派遣軍に行って参謀に行ったわけだ。それから先は浦塩派遣軍あそこの特別班として働いたそこに当時の電報は大分あるが，あそこ露軍の武力の養成，どっちかと云へば政治行政関係だ［No.70］な，そういうような方面でウクライナのやつ（右の枠外に「東部西伯利の人民」と書き込みあり）を助けるとか何とかいうことをやっておった，そのうちにやっぱり今のような事があったんでその，先も話したように，荒木は神経衰弱になったというんで福田さんが来てグリグリと廻って帰ったわけなんだ。」

「臼井哲夫[36]という方御存知でございましょうか。やっぱりホルヴァートに関係がかなりあったらしいんで，後藤さんの下にいて山県元帥（一字削除）なんかとかなり連絡をもっていたらしい［No.71］んですけれども。」

A.「私は臼井さんが前に何をやっていたのか知らん。そこの今ちょっと見た‥‥電報の記事の中に一寸見えておったが，シベリアに来ました。私が招待をしてロシヤの者奴といっしょになってそこでいろいろ話したことがある。内面はそういうことがあったでしょう。あの人はあゝいうような人だからね。当時あの人は何かで台湾精糖[37]か何かでひっかかっているけれど，それは人物としてはえらいです［No.72］よ。臼井哲夫，杉山茂丸[38]，秋山定輔[39]なんていうのはまあ同じような格だね，で活動しておったでしょう。たゞ私はそれを知らないけれど来たのは知っておるです。その後臼井さんと非常に親しくしておってその人柄を知ったんだけど，来た時には何で来たのか知らないです。」

「かなり時期は後の問題になるわけですけれども，高橋少佐[40]と意見

書を書かれて参謀本部に出されたというようなこと，それから陸［No.73］軍大臣にもそれを送られたような話をききましたけれども，その問題―荒木閣下の意見書の作成の事情でございますね，そういう問題について少しお話願いたい。」

A.「それは今お話ししたようにね，内地から来る指令は全部矛盾だらけなんで，出先はどっちにしていいか分らない。例えばウラジオ派遣軍とすれば，松平恒雄[41]さんがあそこの政治部長をしていたが，そこにも内地からくる訓令~~やつ~~がみんな凸凹で分らない。我々の所に［No.74］来る指令でも前後方針に連絡がない~~変る~~。仕事の仕様がないんだ。難関にぶつかった時，どうふみきっていいか分らない。そこでこれじゃいけないと今まであった内地から来た~~る~~訓令等を綜合してそうして自分がみた状態でこれをある程度までまとめて見た。目的はさっき私が話したようにロシアの東漸に対してロシアに反省を促すということになってくる。それにかなうように之をどうしたらいいかということ，之をまぜて，そしてこちらで案を決定してそうしてこうい［No.75］う風に自分は解釈しておる，こういう意見だ，これでよろしいか，よければこのままでこれを基本としてやると云ってやろうとしたのだ。つまり基本方針を出先で作らなけりゃならん程に人も代っておる。高橋がちょうど私の下に居たたった一人の将校なんだから二人でその案を作ろう，それで今までのやつを全部調査をして，指令を全部集めて一気に整理をやろうということになった。行くところもないから「堂盤」（ママ）という大きな料亭を借りて朝から午後の九時かな，［No.76］つまりこちらがいいというまでは酒肴をもってきてはならん，況んや女も来てはいけないと，それで朝から出かけて二人で書類を調べ意見を交換し~~やって~~漸く~~それはそうやって~~しあげたものだ~~ないとすぐに出来るものではない~~。夕方，そうね，七時か八時頃には大体原案が出来て，それから後で食事をしたということだった。その書いたやつを参謀本部陸軍省~~大臣~~にやったと思う。確かあの時は田中さんが陸軍大臣となって居り~~の~~秘書官は建川[42]（後の中将）です。これで間違ないか，間違ったら間違ったところ［No.77］を訂正し書~~い~~てくれと云うて内地へ送った。ところがその時には第二部長が高柳少将[43]だった。高柳少将から字句を一つ二つ直しただけで，まあくだらない字句はどうでもいいんだけれども，返してよこした。そこでこ

れが決定案だ，これによって進むべしと云ってやったのが―そこん中の何処かにあるでしょう――今の高橋と一緒に作った案で，それが僕の唯一の基本なんだ。内地の官憲を頼ってやっても~~向うのやつを相手にしたって~~，日毎に変るんだからね。」［No.78］

「それはウラジオで作成されたわけでございますね。もう一つは時期ですけれども大体何時頃になるわけでしょう。」

A.「えーねー。大分遅いんだから。高橋がその後南ロシヤに派遣をせられたから・・・」

「大正八年の八月に熊本の聯隊長になられたわけですね。それよりはるか前でございますね。」

（「A.」記載し忘れか）「えー，そこをみればすぐ分るがね，大正八年の――今ちょっとあの中に出てきたが―［No.79］グロデコヴォが大正七年の八月ですね。」

「七月です。」

A.「七月。」

「グロデコヴオ宣言が，」

A.「七月，それから八月に向うに行ったんでしょう，ウラジオ派遣軍の参謀に。それから八，九，大正七年の暮あたりだね。」

「それで少し話の筋を変えるわけでございますけれど，セメノフの（一字削除）『日の丸大隊』というのは何時頃作られたのでございましょう。」［No.80］

A.「時期の問題はね，これは大分早いよ。」

「閣下がお帰りになってすぐでございますか。」

A.「さあーね，僕はタッチしておらんからよく覚えていないけれどもね。」

「これは黒木大尉が・・・」

A.「そう，黒木と一緒に帰ってきて，僕に任務が与えられて，中島さんの所へついてやることになった。セメノフが武力がないんだから，ホルヴァートも。それで反共の武力［No.81］としてセメノフが旗上げしているから，セメノフを援助しようという事に内地で決定したわけだ，田中さんの。それでこれは田中さんばかりじゃないよ，これはまあすっきりしておきたいのはね，当時（一字削除）の聯合国は全部同じなんだな。

レーニンを倒して，再び戦線を形作（一字削除）ろうとしている。それでセメノフに対して一番最初援助したのはフランスとイギリスです。フランスが何万フランだったか知らんが金，英国は金はしらんが火砲か何かやっています。［No.82］そこで日本も之を援助するということになってきた。セメノフに対して兵器の供給，ならびに金を，ほんの僅かです，でセメノフの連絡機関として僕と一緒に帰った黒木が行ったわけだ。そうして今の話の問題，何だったかな。」

「『日の丸大隊』の・・・・」

A.「そう，そう，そうしている間にあの辺の居留民が協力してくれて~~希望した~~。セメノフはまだ満洲里より東にいたからね。セメノフは満洲里ま［No.83］で行って本国にはい~~入~~れないんだ，当時満洲~~北~~には。浪人もおり，在郷軍人もおって義勇軍というものを作ったわけだ。これは何時でも何処でも出来るわけだ。それでその義勇軍の編成して出来上ったのが一個大隊ばかりできた。人の名前は一寸覚えておらんけれども，それが有名な『日の丸大隊』だ。之はセメノフから金を出しておる。セメノフの資金は必ずしもフランスから出した資金とか日本から出した資金のみでなく，彼自らが行政をしいておっ［No.84］て租税のようなものを課しておったろうし，まあ汽車で通るやつを五百ルーブル以上は国外に持ってはならんとあとは全部取り上げていいような事をやっておったかもしれん。或は向うの政府官憲の物を抑えたかもしれん。チタに入ってからそうなんだから，チタに入ってからあそこの銀行を抑えたからね。そういう事で（一字削除）出来上ったのが『日の丸大隊』だ。言はゞセメノフ麾下の義勇軍である相当~~まあ~~役には立ったかもしれんがね。之については軍の問題として面白い話がある。そ［No.85］んな事は必要あるかな。」

「ついでにそれを話して下さい。」

A.「で，相当よく日の丸大隊はやった。将校も在郷の将校も入っておる。現役の人は一人も入っておらん。ところがその後にチタに第三師団が行くと同時にセメノフ軍は第三師団の先頭に立って行った。第三師団はだから何もせんですーっとチタに入られたんだ。そうしてチタの政権を握って，チタ政府即ちセメノフ政府なわけだ。無論軍政府だ。でセメノフは没落するま［No.86］では相当に力が出た。そうしたところが

セメメノフ（ママ）が没落をする時にだんだん第三師団が引揚げてしまう。セメノフも次第に戦って退って来にゃならん。最後は満洲里に来たわけだ。それで満洲里西方でもって，あそこに防禦陣（一字削除）地をしいてやっておった。でセメノフの頼るのは日の丸大隊なんだ。で最後の決戦だということになって日の丸大隊は何処だといったところが，日の丸大隊のやつは何処へ行ったか訳が分らんというわけだ。それでその時にさっき話し［No.87］た武田中佐，之は非常にまあ紳士で新しい頭を持っておる。後フランス大使館附武官で現地で~~で~~死んだけれども，田（でん）健治郎[44]さんの婿さんで優秀だった。外交官にはもってこいだった。そりあ，そんじょそこらにおるもんとは違う。フランス語は上手だったし，その武田中佐がこれを見た。黒木と二人でセメノフに対して日本軍の恥だと云って日の丸大隊を探したのだ。そうしたら満洲里の女郎屋にみんな入りこんでおるというわけだ。遂にそれを叩き出して，そうして武田中佐が自ら指揮し［No.88］た。敵が占領しておった小さな山を日の丸大隊で（一字削除）攻撃したわけだ。セメノフは黒木と二人で汽車に乗っておって見ておる。武田は本当に陣頭に立ってやったからね，怪我はしなかったと思うがとうとう敵の占領していた其小山~~。それ~~を占領したわけだ。占領してセメノフにひき渡し漸く面目を施しセメノフも感激して泣たといふ場面もあったが元来~~た。~~そこを占領していたのは~~には~~敵の騎兵であったから~~があった。だから~~馬をたくさん捨てゝ退却した~~おいてったのだ~~。占領した後~~，~~日の丸大隊ハ軍隊でないから軍規がないみんなその捨てゝいった馬をとりに行った。そこらの馬をみんなおれの馬だとバラバラになってやったんだね。そうしているうちに敵が来て又［No.89］取られちまったわけだ。でそれが最後だった。~~その時にセメノフが見て非常に感心してまあようやく名誉回復したという，~~日の丸大隊の最後の華であり本質暴露で軍建成の本質が自覚許りでハない軍規が第一であることを示したものだ」~~なんだな，そういうことだったです。」~~

「何時でも閣下は黒木大尉とはかなり連絡をもっていられたわけでございますか。」

A.「それはもう最初はホルヴァートの武力即セメノフということになっておったんだ。政府の方の方針がそうだった。で彼を助長してホルヴァートを助けるということであった［No.90］から，始終その消息は

きいておったし，私も黒木個人としてはよく知っておるから消息はよく分っておったです。」

「で次に張作霖の問題でございますけれども，張作霖[45]は大体出兵の期間中，セメノフとかホルヴァートに対してどういう態度をとっておりましたか，或は日本に対してでもですね。」

A.「当時の僕の頭に浮かんでいるのは張作霖眼中になし，~~こちらは~~。張作霖自身も，［No.91］わが方針~~おゝせ~~のままで，まあ自分がここでもってどうやら位置を保持すりゃいいという以外に何もなかったと思う。だからこちらの云う通り思う通りになっておったんで，我々はもう当時張作霖なんか居ったか居らんかも忘れてしまったくらいに眼中にはなかったです。張作霖も非常に従順で思うがまゝにやっとったと思う。その方に直接触れてないから知らんけれど何も事件なしです。」

「張作霖でなくして一般に中国軍がかなり［No.92］日支軍事協定[46]で出ているようですけれど，それと日本軍の間のまさつなんかあまり起らなかったわけでございますか。」

A.「別にこれという，まあ向うは支那関係の人の信義でその時の体制におされますからね，これという反抗もないが，腹の中ではその間に自分の勢力扶植を何とかしようという頭があったろうと思う。そこで面白いのはね，満洲国が出来上った時にあそこに張煥相（ちょうかんそう）[47]（満洲里守備旅団長は張煥相，~~しかし満洲国~~［No.93］~~当時の実業大臣をやったと思ふか否か不明，~~）というのがおったでしょう，何をやっておったか実業大臣か何かやっておったでしょう。その張煥相が事件当時少将で満洲里の守備旅団長なんだ。無論張作（一字削除）霖の部下であったからね，これに黒木が終始セメノフに便宜をはかる様談判するのだ。~~あそこの便宜をはかってもらう，何とか，かんとか云ってきかない，で~~黒木は何時でも張が~~彼は~~阿片を飲むから，阿片がきれた頃がいゝと言って~~ちばんいいんだ~~な，その阿片がきれた頃に何処かで阿片又は阿片的なものを~~か何か~~探して持ってつ［No.94］てやってそしてがんとおどかす。そうするとそのままでもって万事が主張の通り通ってしまったといふ有様だった。~~張煥相が満洲里におったです~~。そういうような状態だったから殆どあってもないも同じこっちゃないかと思います。張煥相も相当な人間であるに違いない，満洲国の時に大臣やってるもんね，~~張煥相というやつはね，~~

~~実業大臣か何か・・・・~~」

「もう一つ次にカルムイコフ[48]の事でございますけれど，これとの閣下との関係，乃至は［No.95］関係でなくてもカルムイコフの動きについてお分りになる程度で結構でございますが。」

A.「カルムイコフにには別に其指導に別な人が居て~~あそこにおって誰だったかな~~，カルムイコフの指導をしておった。セメ（一字削除）ノフと同じように，黒木がセメ（一字削除）ノフについておったと同じように，誰だったか~~な~~，一寸今浮んでこない~~考え・・・・~~」

「軍人でございますか。」

A.「えー，軍人が行っとった。でホルヴァートの政権はバラバラじゃ困るというので［No.96］カルムイコフ，セメ（一字削除）ノフというものを~~は~~一つにすると云う考えがあった。カルムイコフはセメヨノフ（ママ）になら従うが，ホルヴァートとはあまりそれが合わ~~は~~ない此男~~・・・これ~~はまあ本当に純粋（一字削除）コサック[49]気分でね。勇敢な沿海洲のコサックです。でその性格はこういうことで分るだろうと思う。当時カルムイコフについておった者が―彼の副官か何か―の乗っておった~~のが~~非常にいい馬を~~だったので或る人がね~~，あれはまあいい馬ですね，とこう云ったらば，はー，あの馬は気に入ったで［No.97］すかというと同時にピストル出して自分の副官をボーンと射って，もっていきなさいと言ったと言ふことです一寸不思議に感ずるけれどもこれはコサックの気分です。一寸我々にはあり得ない状態に思うが，かつて私が第一次大開戦中に今のルーマニヤに行っておった時に，コーカシャン，コサックが居ったです。それで或る晩，大きな――まあどこにでもおるんだけれど，宴会があって，その終でもって，ダンスをします時，――この頃でもやっているだろうね――坐ってね，［No.98］足をパッパッパッと出す。これはね，やっても非常に難しいですよ。しゃがんだままで足をチャッ，チャッ，チャッ，チャッとこう出す，これはコサックの得意な踊り，どっかこの間やっておった，テレビか何かで見た~~からね~~。そういう事をやって非常に騒いだ時にね，僕に向って何かやれと云う，あまりやるものないから，じゃあ剱舞でもやろうと，そこにおった兵隊の剱をかりてやった。それで終って剱を返したところがもう剱をとらない。［No.99］あなたに差し上げたのだという。でだんだんきいてみるとこれが欲しい，い

いとほめたらばもう必ず，例えば君の時計いい時計ね，と云えば必ずはずしてくれる。とらなかったら水くさいと言っ~~く~~て非常に怒る。それで剱を借りたんだからあなたとっておいてくれとその代り，代りをやらにゃあいけない，僕は自分の軍刀やるのいやだからね，それで金をやりゃいいと，幸い兵隊だったから金やってすんだ事だ。それをやらなきゃ怒るんだから。怒りゃみんな［No.100］小刀（キンジャール Кинжал）をもっているんだから，何をするか分らない彼等は皆小さい短刀もったり刀をもっているんだからね，コーカシャのもの~~やつ~~は全部こういった調子だ。で同じようなことでカルムイコフがそういったらポンとやったという話がある。それは私が見たわけではないが。そういう非常に激しい気分の男で，しかしセメノフの下では，言~~云~~うことはききおったです。」

「最後にオムスク政権と（一字削除）日本の関係なんでございますけれども，これに加藤公使とい［No.101］う名前が出てきますし，それから福田大佐という名前が出てくるわけでございます。閣下とその人達の御関係，内至（ママ）オムスク政府との御関係について一寸・・・」

A.「そのことは僕が内地へ帰ってからじゃないかな。それはね，オムスク政府は今のようなふうにして・・・。まあその間一つ経過を話せば，そういうふうな状態で各国共に勝手に自国は都合のよいものを助けた~~は~~国際批判のよい種子をまいた~~にはもってこいなのですが~~，文明国などとハ言えない行動だ~~も何もない~~と僕は思うんだがね。最初はセメノフをフランス，英国が助［No.102］けた。ところが日本が非常に深入りをしてセメノフがむしろ日本に帰依してきた。というのは彼は元来蒙古人だから，ザ･バイカル，蒙古，聯合国というものを作るのが彼の頭にあったわけだ。そこで外蒙から来ておった，今一寸出て来ないが~~にくいが，どこかあの中に出てきますけど~~えらい勇猛なやつがおったね，セメノフの部下について外蒙の軍隊をひっぱって~~と~~いた。そういうことでセメノフは蒙古とザ・バイカル両方をおさえておった。私が~~彼と~~チタを訪問し~~にお~~［No.103］~~っ~~た頃は彼は得意の絶頂で~~で~~あったろうが，話~~をして~~宴会等があった後で乾盃をすると，彼は乾盃はまだ早いですと，何れ北京で乾盃ですと必ず云ったものだ。で彼の意図はおれはジンギスカンの血を受けて居るんだ~~なんだ~~，こんなロシアなんか眼中においておらんのだと云う。実はオノン川のジンギスカンの生れたぢきそば（一字削除）で

彼は生れておる。あそこらには巫子がおります。そいつが予言を云うんだ。セメノフは容貌魁偉だからろ。そこでセメノフをあなたはジンギスカンの生れ変りだ［No.104］というように子供の時から云はれておったものらしいんだな，それで彼は自らジンギスカンを以て任じていたそうな，殊にその時はそうだった。だから北京でもって盃をあげるというようなことを彼は考えた。そこでどこまでも極東，ザ・バイカル以東だけを彼はとりあげる。ザ・バイカル以東というよりザ・バイカルがほしいのだ。ザ・バイカルと蒙古とです。極東の沿海洲の方は彼は余り眼中にない，カルムイコフが沿海洲の方をやっておった。そういうふうにな［No.105］って日本の勢力が大きくなっていたからセメノフはむしろ東洋人として東洋の日本をには非常に尊敬したもんです。そしてれはまあ全力をあげて日本のためにつくしたものだ。ソ連が終戦後彼を捕へてだから殺したのは可哀そうですよ。他方セメノフのこういったやり方を知った英国は穏かならず，英国なりその他の聯合国の頭は，ウラル戦線をつくってレーニン政府を叩き倒そうというのが目的なのだ。まだガタガタだったけれどもホルヴァートが政権を建てるとその前後にあそこ［No.106］で英国軍はちょうど亡命をして近東に来たコルチャック[50]を薬籠のものとしたつかまえた。コルチャックというのは元黒海艦隊司令長官で地位もちゃんとある，あれは非常な元気な男で革命後ソ連に捕る時に皇帝から貰っておった金剱，金色の柄に皇帝のサインのあるのの剱と書いてこれこれは勲章と同じような武功剱です。そいつを黒海から上陸すあがる時にへし折って海に叩き込んでレニン敵の手にこんなものを渡すもんかと云って棄てたようなものでそれから転々亡命をして，英国に行こうと思って亡命をしてたしかアラビヤのあの［No.107］近辺ですよ，何処か一寸忘れたがね，あの辺に行って英国に亡命しようというのを英国が見出し保護し捕えて，いいものがあるから極東の軍司令官はコルチャックがよかろうということになった。東京に来たとき英国の大使[51]が我が政府に話をつけた。で待っていましたとばかり，何も意見がないんだからね，よろしいというのでコルチャックをホルヴァートの軍にしようとした。ところがセメノフがきかない。何だと，コルチャックは何者ぞと，まあこういうことなんだ。［No.108］セメノフは最初先輩だからよろしいと云ったんだ。云ったけれども第一にコルチャックがハルビ

ンからセメノフの軍隊を~~満洲里に~~見に行った時ですよ，その時はセメノフは満洲里におった，そうしたところがセメノフはね，前言った様な~~そういうような~~男でもあるからして何も今頃のコルチャックなんてと馬鹿にしている。この頃の将官に対して世間がありゃ何だと云っている様なものだ。そこでコルチャックがなんだというわけで迎えにも出ない。夜遅くですよ。片方はまあ元の［No.109］コルチャック黒海艦隊司令長官のつもりで行った。片方はコサックの一大尉でしょ，しかも副官だけをやった。迎へなしでコルチャックはむくれたわけだ。セメノフの司令部というのは汽車の中にある，それで汽車の中に招待した。自分の上官だと思ってないから申告するということもなしでやったんだ。お茶も出さない。それでコルチャックが茶一杯もらいたいと云ったら水を持ってきて出したんだね，水を出すことは日本だってあまり好まないように侮辱に近いとコルチャックハ怒った最も（ママ）深夜で湯もなかったといふのだが~~やな~~，［No.110］するとコルチャックはむっと怒っちゃって何か云ってそのまゝ帰ってしまっ~~ちゃ~~っ（ママ）た。でセメノフがお前は何だい，人に助けられてきたんぢゃないか，おれはここで独立して自分の腕でここまでもってきたんだということでこれが又合はない。つまりコルチャックというものを出して司令官につれていったもんだからセメノフは承知しない，というわけだったのだ。~~」~~コルチャックの其後の没落までの経緯即ちオムスク政権の潰滅はそれから数ヶ月の後で面白い余話もある」

校註

1） 日本陸軍軍人。1887–1966。シベリア出兵前後における荒木の略歴は，次の通り。1915 年 4 月陸軍歩兵少佐としてロシア出張，同年 6 月よりロシア軍に従軍し（–18 年 4 月，15 年 8 月中佐），ガリツィア，ルーマニア，ドブルジア方面の戦線を視察。18 年 1 月からシベリア，中国東北のハルビンに駐在（18 年 7 月大佐），18 年 11 月浦塩（浦潮）派遣軍参謀。この間，現地で，各種情報収集，傀儡勢力の擁立･支援，各種宣伝，等々の工作に従事。19 年 7 月熊本の第 23 連隊長へ転出。

2） オーストリア＝ハンガリー帝国内のガリツィア・ロドメリア王国（1772–1918）の地域（現在のポーランドとウクライナに跨がる地域）。

3） ガリツィアにあったオーストリア＝ハンガリー帝国軍の要塞。ポー

ランド語プシェムィシル（Przemyśl），ウクライナ語でペレームィシュリ（Перемишль）と呼称される。ロシア軍は，1915 年 3 月に同要塞を陥落させるも，同年 6 月にはドイツ軍に奪還された。

4） ウラジーミル・スホムリノフ（1848–1926）陸軍大臣（在 1909–15）の誤りか。

5） 本野一郎（1862–1918）。ロシア駐在公使（1906–08）・大使（08–16）を経て，1916 年 10 月寺内正毅内閣成立により外務大臣。四次にわたる日露協商など，常に日露交渉の第一線に立ち，シベリア出兵に対しては積極的出兵論を唱えていた。しかし，その主張は入れられず，18 年 4 月病気を理由に外相を辞職。

6） 泰平組合。1908 年 6 月，日本陸軍の主導により，三井物産合名会社と合名会社大倉組および合資会社高田商会の共同出資により設立された商社。日本陸軍からの協力と援助を受け，兵器輸出の促進を目指し，第一次世界大戦期に英・仏・露や中国に大量の兵器を輸出して巨額の利益を得ていた。なお，泰平組合は，高田商会が脱落した後，三菱商事が参加し，1939 年 4 月に昭和通商へと改組･名称変更される。

7） 日本陸軍軍人。1862–1938。1889–93 年イタリア留学。1897–1899 年フランス駐在武官。日露戦争時に陸軍省軍務局砲兵課長として砲兵増強に尽力。1916 年 8 月第 16 師団長，17 年 8 月待命，19 年 4 月予備役。

8） ルニョー（Eugène Louis Georges Regnault，1857–1933）駐日フランス特命全権大使（在 1913–1918）。1918 年 8 月のフランス軍のウラジオストク上陸に伴い，在シベリア高等政務官に転出した。

9） 山県有朋（1838–1922）。元帥陸軍大将，元老，枢密院議長として日本の政界に大きな影響力をもった。シベリア出兵に関しては慎重な態度をとっていた（山県有朋関係文書編纂委員会編『山県有朋関係文書』全 3 巻，山川出版社，2005–08 年）。

10） レーニン（Владимир Ильич Ленин，1870–1924）指導によるロシア十月革命（1917 年 11 月［ロシア暦 10 月］）により成立した政権を指す。

11） 日本の外交官。1865–1936。清国公使，オーストリア大使兼スイス大使，アメリカ大使を経て，第二次西園寺公望内閣で外相（在 1911–12），16 年にロシア大使。18 年 2 月ロシアとの国交断絶により帰国･離任。原敬内閣，高橋是清内閣，加藤友三郎内閣で外相（在 18–23）。シベリア出兵には反対の立場をとっていた。

12） 「ケレンスキー革命」が具体的に何を指しているのかは不明。前後の文脈から 1917 年 7 月の「七月蜂起」鎮圧を契機に社会革命党右派のアレクサンドル・フョードロヴィチ・ケレンスキー（Александр

Фёдорович Керенский，1881–1970）が臨時政府の首相となり，同政権が十月革命により倒される過程における一連の事象のいずれかを指すものとして使用されていると推察される。なお，前述されている「第一革命」は，一般に 1905 年 1 月の「血の日曜日事件」を発端に始まった革命運動を示す。但し，文脈的には，荒木が二月革命の意味で使用している可能性を排除できない。

13） 白海に注ぐ北ドヴィナ川河口にある，ロシア北西部の都市。17 世紀末にロシア皇帝ピョートル 1 世により軍港として開発された。十月革命後，反革命軍（白軍）の拠点の一つとなり，18 年 8 月にはイギリスやアメリカが一時占領をおこなった。

14） 第一次世界大戦における軍事物資調達を念頭に新たに建設されたバレンツ海のコラ湾右岸に位置する港（1915 年建設）と同港を含む都市（1916 年建設）。現在のロシア連邦ムルマンスク州の州都で，建設当初の呼称は，「ロマノフ・ナ・ムールマネ」で，二月革命後に「ムルマンスク」。1918 年 3 月，ドイツとソヴィエト＝ロシアの講和が成立すると（ブレスト＝リトフスク条約），ドイツから軍需物資を守ることを理由に英仏の連合軍が同地に上陸し，同地を占領した。これが，対ソ干渉戦争（18–22 年）のはじまりとなる。19 年には反革命軍が同地を占拠し，アレクサンドル・ヴァシーリエヴィチ・コルチャーク（後述）の最高権力を承認するが，連合国軍が同地から撤退すると反革命軍の支配力は急速に衰え，20 年にソヴィエト＝ロシアが同地の政権を掌握した。

15） アウグスト・フォン・マッケンゼン（August von Mackensen，1849–1945）。ドイツ帝国陸軍軍人。第一次世界大戦が始まるとタンネンベルクの戦い（1914 年）で名声をあげ，1916 年からはルーマニア戦線で活躍。ブカレストの戦い（1916 年 11–12 月）では，ルーマニア軍を撃破し，ルーマニアの首都ブカレストを制圧し，終戦までルーマニア軍政総督を務めた。

16） ヤシ，ヤッシーとも表記。ルーマニア北東部，モルダヴィア地方の中央に位置するルーマニア東部の主要都市の 1 つ。第一次世界大戦中，ルーマニアは，タンネンベルクの戦いで首都を失うと，同地に首都を移した。

17） 中島正武（1870–1931）。日本陸軍軍人。第一次世界大戦に際して，ロシア大本営付武官としてロシア軍に従軍。17 年 8 月，参謀本部第二部長（情報担当）。18 年 1 月にブラゴヴェシチェンスク（武市）に潜入･調査，18 年 3 月ハルビン駐在，現地の傀儡政権擁立工作に従事，同年 8 月浦塩派遣軍高級参謀（浦塩派遣軍司令部第二課長）へ転出。

19 年 1 月参謀本部第二部長。

18） 黒木親慶（1883–1934）。日本陸軍軍人。1915 年からロシア従軍武官となり，第一次世界大戦に従軍。18 年からはハルビンの荒木貞夫の直接的指揮下で，セミョーノフ（後述）軍の軍事顧問となり，同軍の支援工作を積極的に展開。20 年予備役編入。その後も，セミョーノフの支援を継続した。荒木との関係は，シベリア出兵後も続き，昭和期には荒木に連なる皇道派人脈で重きをなしていた。シベリア出兵時期を含む，黒木の活動や現地の状況に関わる史料に宮崎県総合博物館所蔵の「黒木親慶文書」がある。また，目録としては，東京大学法学部附属近代法政史料センター原資料部編『黒木親慶関係文書目録』（東京大学法学部附属近代法政史料センター原資料部，1992 年）がある。

19） グリゴリー・ミハーイロヴィチ・セミョーノフ（Григорий Михайлович Семёнов，1890–1946）。ザバイカル州南部でコサックの父とブリヤート人の母の間に生まれる。第一次世界大戦にはロシア軍人として東部戦線に出征，二月革命後にケレンスキー陸相に民族部隊編成を進言し，モンゴル＝ブリヤート騎兵連隊長に任命されザバイカルに派遣される。十月革命後は，満洲里に拠点を移し反革命軍として活動し，特別満洲里支隊アタマン（軍事行政単位としてのコサック軍の統括者）の称号を得る。黒木親慶らを通じて日本軍からの支援を得て，18 年 1–3 月にチタに侵攻を企てるも失敗。その後，日本軍からの支援を受けつつ改めてチタに進出し，18 年 9 月から 20 年 10 月にかけて同地で政権を建てるも，日本軍のザバイカルからの撤退により政権は崩壊。セミョーノフ自身は，大連に亡命。21 年春にはウラジオストクで再挙をはかるも日本軍の支持を得られず失敗。その後は，日本，アメリカ，満洲国で亡命生活を送り，45 年満洲国に侵攻してきたソ連軍により逮捕され，翌年モスクワで処刑される。

20） 日本の官僚・政治家（1857–1929）。シベリア出兵前後の略歴は，1916 年 10 月寺内毅内閣内相兼鉄道院総裁，18 年 4 月外相（–同年 9 月）。外相として後藤は，シベリア出兵に関して，当初慎重だったが 6 月以降積極論に転じ，最終的な派兵決定に大きな役割を果たすこととなる。なお，後藤新平関係史料に関しては，後藤新平記念館所蔵「後藤新平文書」があり，マイクロフィルム版が丸善雄松堂から販売されているほか，国立国会図書館憲政資料室で閲覧することができる。

21） ドミートリー・レオニドヴィチ・ホルヴァート（Дмитрий Леонидович Хорват，1858–1937）。ロシアの軍人。工兵出身で，ロシア各地の鉄道敷設に従事。1903 年以来，中東鉄道（東清鉄道）管理局長として

現地におけるロシア側の最高責任者となっていた。十月革命後の 17 年末，ホルヴァートは，ハルビンでの権力奪取を図っていたボルシェヴィキ派に譲歩を余儀なくされるも，現地の連合国領事団による中国政府へのボルシェヴィキ派排除要請により現地中国軍がボルシェヴィキ派を排除すると，再び中東鉄道における地位を回復していた。この状況下，中島正武や荒木貞夫らを中心とする日本側は，ホルヴァートに接近。18 年 7 月，ホルヴァートは，日本側の援助を受けて沿海州のグロデコヴォで「全ロシア臨時政府」の樹立宣言をおこなった。18 年 11 月にオムスク（後述）にコルチャーク政権（後述）が成立すると，日本側は同政権に反革命政権を結集する方向に政策転換をはかり，ホルヴァートも同政権に合流する。しかし，ホルヴァートは，コルチャークと安定的な関係構築ができないまま，19 年 7 月には同政権を追われる。その後は，中東鉄道管理局長として活動し，20 年 1 月にオムスクの政権が崩壊すると，中東鉄道附属地での統治権行使を宣言。しかし，20 年 3 月，ハルビンの労働組合などが，中東鉄道附属地統治権の沿海州ゼムストヴォ参事会臨時政府（実質的にはボルシェヴィキ派が指導する政権）への移管をホルヴァートに要求。ホルヴァートがこれを拒絶すると，同地でのゼネストが始まった。これに対して，中国軍が武力鎮圧を行うと同時に，ホルヴァートの軍事力を支えていた中東鉄道警備隊の武装解除を要求。万策尽きたホルヴァートは 20 年 4 月ハルビンから北京に移住し，そこで生涯を終えることとなる。

22） 武藤信義（1868–1933）。日本陸軍軍人。陸軍内のロシア通の第一人者と目されていた。18 年，中島正武の後を受けてハルビンに駐在し，特務工作に従事。その後，イルクーツク，オムスクでも特務工作に従事。1919 年 1 月，帰国により参謀本部第一部長（作戦）。

23） 浦塩派遣軍。日本陸軍のシベリア出兵に際して，1918 年 8 月に編成。22 年 11 月復員。

24） 寺内正毅（1852–1919）。日本の陸軍軍人，政治家。1916 年 10 月首相（–18 年 9 月）。臨時外交調査会を組織し，外交方針の挙国一致体制を目指し，中国の段祺瑞内閣支持，シベリア出兵を断行。シベリア出兵関係を含む「寺内正毅関係文書」があり，国立国会図書館憲政資料室で所蔵・公開されている。

25） 日本陸軍軍人。1866–1932。シベリア出兵の前後の略歴は，1914 年 5 月参謀本部第二部長，16 年 5 月欧州出張（–17 年 1 月），17 年 8 月第 5 師団長，18 年 10 月参謀次長，1921 年 5 月台湾軍司令官。なお，福田関連史料に，国立国会図書館憲政資料室所蔵「福田雅太郎関係文書」

がある。

26）ホルヴァートによるグロデコヴォでの「全ロシア臨時政府」樹立宣言を指す。前掲註 21 参照。

27）1918 年 5 月 14 日に起こったウラル山中のチェリャビンスク駅でのチェコスロバキア軍団とドイツ俘虜部隊のハンガリー兵との間での衝突が，チェコスロバキア軍団と地方ボルシェヴィキとの衝突となり，シベリア鉄道沿線に波及していった事件を指す。オーストリアに編入されていたチェコとスロバキアからは，その支配から逃れるためにロシアに移住する者もいたが，その子孫や第一次世界大戦でロシア捕虜となったチェコ人やスロバキア人の志願者により，ロシアで組織されたのがチェコスロバキア軍団だった。同軍団は，オーストリアと戦うロシアに協力することでチェコとスロバキアの共同独立を目指していたが，ブレスト＝リトフスク条約締結（1918 年 3 月）後にロシアが戦争から離脱すると，アメリカを経由してフランスの西部戦線に移動することを目指してウラジオストクに移動を試みていた。前述の衝突事件はこの過程で発生した。同事件後，チェコスロバキア軍団はシベリア鉄道沿線を制圧していたが，フランスやイギリスでは同軍団が殲滅の危機に瀕しているとの憶測に基づく同軍団救出の必要を国際世論に向けて喧伝し，18 年 6 月のイギリス・フランス・イタリアによる連合国最高軍事会議では日本に対するシベリア出兵要請を決議する事態を引き起こし，日本がシベリア出兵を決断する重要な契機の一つとなった。なお，チェコスロバキア軍団は，18 年にチェコスロバキアが独立を宣言（翌年のパリ講和会議で国際承認）すると，シベリアに留まる理由を失い，19 年 9 月にロシアからの撤退を決定し，20 年 2 月にはソヴィエト政府との停戦協定に調印し，同年 9 月に撤兵を完了している。

28）ピョートル・ヤーコヴレヴィチ・ヂェルベル（Пётр Яковлевич Дербер，1888–1938）。社会革命党（後述）員。トムスクを中心にシベリア地方主義運動を展開し，17 年 12 月に臨時シベリア地方評議会の構成メンバーとなる。同評議会が，18 年 2 月にトムスク・ソビエトにより解体されると，ハルビンに逃亡。同地で日本をはじめとする連合国側の援助を求めて活動するも成果を得ることなく，ウラジオストクに移動し，6 月以降加藤寛治（後述）らと接触し，その支持を得ることに成功。18 年 6 月にチェコスロバキア軍団がウラジオストクで反乱を起こしボルシェヴィキ派を駆逐すると，ヂェルベルは自治シベリア臨時政府が同地の政権を掌握したことを宣言し，同政府の首班となった（7 月末には首班をラヴローフと交代）。同政府が

18 年 9 月にオムスクの全ロシア政府に吸収され消滅すると，ヂェルベルもオムスクに移動。コルチャーク（後述）が事実上のクーデタで全ロシア政府の最高執政官となると，オムスクを離れる。その後，シベリア，モスクワなどで活動するも，1930 年代のスターリンの大粛正により処刑される。

29） 現在のロシア連邦中南部のシベリア連邦管区西端に位置する都市。1716 年建設，1782 年にオムスク市。19 世紀末，同地にシベリア鉄道の駅ができると，鉄道とイルティシュ川の水運が交差する交通の要衝となり，西シベリア開発の中心都市として発展。二月革命後，同地にボルシェヴィキ派のソビエト政権が成立するも，18 年 6 月にチェコスロヴァキア軍団により打倒され，反革命の臨時シベリア政府が成立。その後，18 年 11 月，臨時シベリア政府を含む各地にあった反革命政権を合同・再編する形で全ロシア政府が成立（11 月 18 日にはコルチャークが事実上のクーデタにより全権を掌握）。以後，同地は，1919 年 11 月に赤軍に破れたコルチャークがイルクーツクに向けて移動するまで，全ロシア政府の首都として機能した。

30） ミハイル・コンスタンチノヴィチ・ヂチェリヒス（Михаил Дитерихс Константинович, 1874–1937）。帝政ロシアの陸軍軍人。1917 年に陸軍中将を経て最高総司令部付き補給総監。17 年 11 月ウクライナ逃亡後，チェコスロヴァキア軍団に参加し同軍団参謀長。コルニーロフ派あるいは王党派と目されており，1918 年 6 月 29 日にウラジオストクで生じたチェコスロヴァキア軍団による現地ソビエト政権打倒のクーデタでは主導的役割を担い，打倒されたソビエト政権に取って代わって現地支配を行った自治シベリア臨時政府では中心的な役割を担った。その後，コルチャーク政権に参加し，コルチャークの委託により，19 年前半，ニコライ 2 世殺害状況調査を監督。21 年 5 月に成立したウラジオストクを中心とする沿海州にあったプリアムール臨時政府を 22 年 6 月にメルクーロフ兄弟から引き継ぐ。同政権崩壊後，中国に亡命。31–37 年，ロシア全軍連合（世界各地に逃亡した旧ロシア軍維持のために結成された反ソ組織。ソ連崩壊後はロシア本国で活動を継続）極東支部長を務め，上海で死去。

31） ロシアの政党。エスエルと略称される。ナロードニキの流れを汲む革命政党として 1901 年に結成。十月革命後，左派は一時ソヴィエト政権に参加したがまもなく離脱した。ソヴィエト政権に反対する党員たちは，サマーラその他で政権を樹立したが持続できず国内外に分散した。1922 年に非合法化され，国内での活動が不可能となった。

32） 日本海軍軍人。1870–1939。1899 年から 1902 年にかけてモスクワに

駐在。海軍内のロシア通で外交手腕もあると目されていた。1917年12月，ウラジオストクでボルシェヴィキの労兵ソビエトが全市の権力掌握を宣言すると，イギリスとアメリカが相次いで軍艦を派遣。日本も，18年1月，現地日本人保護を名目に，加藤を司令官とする第五戦隊をウラジオストクに派遣。18年4月，ウラジオストクで日本人3名が殺傷される事件がおこると，加藤は独断で陸戦隊を上陸させ，同地の警備にあたらせた。加藤は，ヂェルベルを支持するなど，荒木貞夫などの陸軍側状況判断と異なる見解を持ち，しばしば対立していた。18年12月，横須賀鎮守府参謀長。なお，ウラジオストク派遣中の加藤の日記が記録された，加藤寛治著・伊藤隆編『続・現代史資料（5）：海軍―加藤寛治日記』（みすず書房，1994年）がある。

33） 武田額三（1881–1928）。日本の陸軍軍人。1910年12月，参謀本部員。12年5–8月カムチャツカ出張。13年10月，フランス大使館付武官補佐官。以後，ロシア駐在，ロシア軍従軍武官，ルーマニア軍従軍武官を経て，17年1月，参謀本部付。18年8月，イルクーツク駐在となり諜報活動に従事。19年10月，ロシア大使館付武官。20年6月，参謀本部付に転じ，陸大教官。22年11月参謀本部員ロシア班長を経て，23年8月，参謀本部欧米課長。23年9月，参謀本欧米課長／関東戒厳司令部高級参謀，1924年12月，歩兵第77連隊長に転出。27年2月，フランス大使館付武官。妻は，田健治郎（後述）の娘。

34） 坂部十寸穂（1877–1930）。日本陸軍軍人。1909年，ハバロフスク駐在（–1910年）。1914年9月から16年5月まで従軍武官としてロシア在勤。15年，中佐に昇進，参謀本部員（第二部ロシア班長）。18年1月以降，ウラジオストク，ブラゴヴェンチェンスクなどで中島正武らと諜報活動に従事。現地で加藤寛治らとヂェルベルを支持する行動をとっていた。18年8月，浦塩派遣軍参謀。なお，荒木と面談した際の坂部の階級は中佐。

35） 菊地義郎（1877–1944）。日本の外交官。1917年2月より在ウラジオストク日本総領事。20年11月から浦塩派遣軍政務部長を兼任。極東共和国との交渉に尽力。

36） 日本の実業家，政治家。1863–1935。第12–14回の総選挙で当選し衆議院議員（1914–24年）。中島正武が18年2月段階で構想していた傀儡政権構想は，同人の諜報活動に帯同していて島田元太郎（ニコラエフスクで島田商会を立ち上げ，成功していた日本人。「在留邦人中のキング」とも称されていた）が臼井にあてた書簡（「田中義一関係文書」に収録）から窺うことが出来る。

37） ここで，荒木が言及しているのは，1909年に発覚した贈収賄事件「日

本製糖汚職事件」で臼井哲夫が検挙され有罪が確定していたことを指すものと考えられ，「台湾精糖」ではなく「日本精糖」（1896 年渋沢栄一が設立，1906 年日本精製糖を合併して，大日本製糖と改称）の誤りと考えられる。なお，台湾製糖株式会社は，1900 年設立（02 年操業開始）の製糖会社で，台湾最初の新式製糖工場を擁し，台湾総督府からの補助を受けつつ，台湾を代表する製糖会社に成長した企業。

38） 日本の政治家・実業家・著述家。1864–1935。北九州や福岡の産業開発に関わると共に，頭山満と親交を持つなど，大陸志向も持ち，日本の台湾，朝鮮，満洲統治にも関与。その過程で，伊藤博文，山県有朋，桂太郎，寺内正毅，後藤新平，などに接近し，政界の黒幕として縦横に活躍した。推理小説夢野久作の父でもある。

39） 日本のジャーナリスト・政治家。1968–1950。1893 年，反権力の大衆新聞である『二六新報』を創刊。経営難で一旦休刊するも 1900 年再刊。東京で最多発行部数を持つ新聞に成長。また 1902 年に衆議院議員に当選するも，04 年に桂内閣からロシアのスパイとの嫌疑をかけられ辞職。08 年に『二六新報』の経営から離れ，以後は，日本の大陸政策も含めて，政界の黒幕として活動。

40） 高橋捨次郎（1883–1939）。日本陸軍軍人。1916 年 7 月，従軍武官としてロシアに在勤（–18 年 4 月）。ハルビンにおいて荒木貞夫の下で特務工作に従事。23 年ハルビン特務機関長。

41） 日本の外交官・政治家。1877–1949。1918 年 8 月，浦塩派遣軍政務部長。現地で様々な政治的調整にあたるなか，ボルシェヴィキ権力の浸透と安定化および，コルチャーク政権に関する厳しい評価を本国に伝えている。20 年 11 月欧米局長，ワシントン会議に全権団事務総長兼シベリア部主任として参加。ソ連および極東共和国との国交調整を担当。23 年 9 月外務次官。

42） 建川美次（1880–1945）。日本の陸軍軍人。1911 年 8 月，イギリス駐在。13 年 7 月インド駐在武官。16 年 1 月参謀本部附・欧州戦争観戦武官，同年 8 月イギリス従軍武官。18 年 3 月参謀本部員，同年 7 月陸軍大臣秘書官。20 年 7 月，参謀本部附国際連盟陸軍代表随員。23 年 3 月，騎兵第 5 連隊長。

43） 高柳保太郎（1870–1951）。日本の陸軍軍人。第一次世界大戦時，参謀本部作戦課長から青島攻略軍（独立第 18 師団）兵站部長を経て，観戦武官としてロシア軍に従軍。19 年 2 月，浦塩派遣軍高級参謀。弘報班およびオムスクの特務機関を設立。20 年 7 月，浦塩派遣軍参謀長。極東共和国との停戦協定に日本側代表として調印。22 年待命，

同年満鉄嘱託（–31 年）。23 年予備役。満鉄社長室に宣伝・宣撫を行う「弘報係」の設置を提言し初代係長。

44） 日本の官僚，政治家。1855–1930。16 年 10 月寺内正毅内閣成立にて逓信大臣（在 –18 年 9 月）。19 年 10 月，文官初の台湾総督（在 –23 年 9 月）。23 年 9 月第 2 次山本権兵衛内閣にて農商相(在 – 同年 12 月)。26 年，枢密顧問官。なお，田には，寺内正毅内閣の動向も記録されている日記を含む「田健治郎関係文書」がある（国立国会図書館憲政資料室蔵）。

45） 中国の軍人, 政治家。1875–1928。1916 年奉天省地方政府権力を掌握。以後，17 年に黒龍江省，19 年には吉林省を掌握し，中国東北三省を事実上掌握。1920–21 年の日本軍による間島出兵を事実上承認する一方で，20 年 3 月のホルヴァート追放と中東鉄道利権の回収には積極的に関与するなど，日本とは相互利用の不即不離な関係を保っていた。

46） 「日支共同防敵軍事協定」。1918 年 3 月に寺内正毅内閣と第一次世界大戦に参戦（17 年 8 月）していた段祺瑞内閣との間で交換された公文と，同年 5 月に交換公文にもとづき締結された軍事協定からなり，陸軍と海軍の双方の協定がある。ドイツとオーストリアを対象とした共同防敵が取り決められているが，主眼はロシア革命後に流動化していた極東政治状況への対応を念頭においたもので，同協定により，中国側は日本からの借款を得る一方，日本側はシベリア出兵時に中国東北地域北部を占領する根拠として利用した。20 年 9 月，安直戦争により段祺瑞が失脚し靳雲鵬内閣が成立すると，原敬内閣により破棄が決定された。

47） 中国の軍人，政治家。1882–1962。日本陸軍士官学校第 8 期歩兵科卒。中国東北地方での軍歴を重ね，17 年 12 月黒龍江督軍参謀長，18 年中東鉄道哈満段警備司令，19 年 8 月東北陸軍第 19 混成旅旅長兼中東鉄道護路軍副司令，21 年濱江鎮守使兼務。22 年中東鉄道護路軍司令，25 年中東鉄道代理督弁兼地畝局局長，27 年 7 月東省特別区行政長官と，中東鉄道に関わるポストを歴任。満洲国建国後は，37 年司法部大臣，42 年参議府参議を歴任。

48） イワン・パーヴロヴィチ・カルムイコフ（Иван Павлович Калмыков, 1890–1920）。カザークの軍人。18 年 2 月中島正武の支援を受けてウスリー・カザークのアタマンに選出され，日本の支援を受けつつ反革命軍事活動を展開。18 年 7 月，グロデコヴォを占領，同年 9 月には日本陸軍第 12 師団と共にハバロフスクに侵攻・占領し，ロシア軍衛戍司令官に就任。しかし，コルチャーク政権の倒壊とともに，急

速に勢力を失い，20 年 2 月に中国領に遁走したが，中国側に捕えられる。一旦逃亡したが，再び中国側に捕えられ，20 年 9 月に殺害された。

49）ロシア国境警備にあたった，独立自治の社会集団。コサックは英語。ロシア語のカザークという言葉はトルコ語起源で，「労働者」「作男」「自由な戦士」などの意。彼らの軍事力はしばしば革命運動の弾圧に利用された。ソヴィエト政権下で，身分として廃止された。

50）アレクサンドル・ヴァシーリエヴィチ・コルチャーク（Александр Васильевич Колчак，1874–1920）。ロシア海軍軍人，反革命指導者。第一次大戦中は，黒海艦隊司令官。2 月革命後，ボルシェヴィキ派により司令官を解任後，臨時政府によりアメリカに派遣。帰路の日本滞在中に十月革命の報に接する。在中国ロシア大使ニコライ・クダーシェフの要請をうけ，18 年 4 月ホルヴァートを軍事面で支えるべく中東鉄道理事に就任。しかし，18 年 7 月にはホルヴァートを見限り東京に戻る。18 年 10 月，イギリスの支援を受けつつ，ウラジオストクを経由してオムスクに入り，11 月 3 日に同地の全ロシア政府陸海相に就任すると，同月 18 日にはクーデタにより同政府を掌握し「最高統裁官」に就任。その後，日本は従来のセミョーノフやホルヴァートの支援からコルチャーク政権支援に政策変更をおこなったが，連合諸国の歩調は揃わなかった。当初は軍事的攻勢を見せたコルチャーク政権だったが，内政の失敗もあり，次第に赤軍に圧倒され，19 年 11 月オムスクを放棄し，イルクーツクに撤退。その途中の 20 年 1 月に下野を宣言し政権は崩壊した。チェコスロバキア軍団によりイルクーツクの政治センターに引き渡され，翌月銃殺された。

51）ウィリアム・カニンガム・グリーン（William Conyngham Green，1854–1934）。在日本特命全権大使（在 1913 年 3 月 –1919 年 1 月）。

以上の校注に際しては，以下の文献を参照した。また，兎内勇津流氏から多大なご助力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』，吉川弘文館，1979–1997 年

外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『日本外交史辞典』，山川出版社，1992 年

福川秀樹編著『日本陸軍将官辞典』，芙蓉書房出版，2001 年

尾形勇［ほか］編『歴史学事典』全 15 巻，弘文堂，1994–2008 年

秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』第 2 版，東京大学出版会，2005 年

岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』，岩波書店，2013 年

竹内啓一・手塚章・中村泰三・山本健兒編『世界地名大事典』第 4・5 巻（ヨーロッパ・ロシアⅠ～Ⅲ），朝倉書店，2017 年
橘川学『秘録陸軍裏面史〈上巻〉―将軍荒木の七十年』，大和書房，1954 年
細谷千博『シベリア出兵の史的研究』，有斐閣，1955 年 ※「岩波現代文庫」（2005 年）で再版。
荒木貞夫著・有竹修二編『荒木貞夫風雲三十年』，芙蓉書房，1975 年
西原征夫『全記録ハルビン特務機関―関東軍情報部の軌跡』，毎日新聞社，1980 年
原暉之『シベリア出兵―革命と干渉 1917–1922』，筑摩書房，1989 年
原暉之（研究代表）『黒木親慶文書の研究：平成 6–7 年度科学研究費補助金（総合 A）研究成果報告書』，1999 年
井竿富雄『初期シベリア出兵の研究：「新しき救世軍」構想の登場と展開』，九州大学出版会，2003 年
麻田雅文『中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」1896–1935』，名古屋大学出版会，2012 年
笠原十九司『第一次世界大戦期の中国民族運動』汲古書院，2014 年
麻田雅文『シベリア出兵：近代日本の忘れられた七年戦争』中公新書，2016 年
名古屋貢「泰平組合の武器輸出」『東アジア：歴史と文化』第 16 号，1–22 頁，2007 年
富田武「荒木貞夫のソ連観とソ連の対日政策」『成蹊法学』第 67 号，15–65 頁，2008 年
纐纈厚「戦前期日本の武器生産問題と武器輸出商社―泰平組合と昭和通商の役割を中心にして」『国際武器移転史』第 8 号，99–125 頁，2019 年

解　題

荒木貞夫（1877 ～ 1966）は，昭和初期の陸軍における，いわゆる皇道派の中心人物として知られている。1931 年 12 月，満洲事変の勃発後に成立した犬養内閣の陸相に就任して斉藤實内閣の途中の 1934 年 1 月までこれを務め，その後 1936 年に二・二六事件を受けて退役した。その後，近衛内閣と平沼内閣で文相（1938 ～ 1939）を務め，皇道教育を推進した。

戦後はA級戦犯として極東軍事裁判の被告となり，終身禁固刑を言い渡されるが，1955年に病気のため釈放される。1966年に死去した。

陸軍における荒木は，田中義一などとともにロシア通の軍人という面を持つ。陸軍大学校でロシア語を学び，日露戦争に従軍の後は参謀本部のロシア班に配属，その後ロシア駐在武官（1909～1913），第一次世界大戦観戦武官としてロシア派遣（1915～1918）を経験し，実地でロシアを見ていた。シベリア出兵の直前の時期においては，ロシアが建設した中東鉄道の本拠地ハルビンの特務機関で現地工作に当たり，出兵が本格化した後の1918年11月に浦潮派遣軍参謀に異動。翌1919年7月に熊本の歩兵第23連隊長となって，出兵の第一線を離れた。

つまりこの口述記録は，出兵の初期において現地対応の前線を担当した陸軍の佐官級将校の回想ということである。30年近い歳月を経て，世相や価値観が大きく変わった時代に語ったものであるため，関連史料と突き合わせながら注意深く読み解く必要がある。

荒木の口述記録は，第二次世界大戦後の1957年10月に，狛江市の自宅でインタビューしたものに，本人による加筆訂正を施したものという。「近代中国研究委員会」と印刷した縦書き200字詰め原稿用紙110枚に記されている。まずは，この内容を紹介しながら，史料としてのその意義を考えてみることにしたい。

口述において，荒木は観戦武官としてロシアに滞在中，陸軍に文書を三回送って出兵を「献策」したと述べている。その最初のものは，1916年頃ロシア軍に小銃とその弾薬の供給を求めたものという。実際，日本からロシアに砲兵は派遣されていないが，小銃と小銃弾の供給が実施された。なお第一次世界大戦期の泰平組合を通じた武器供給については，後掲「参考文献」にあるバールィシェフ論文を参照されたい。文中4枚目にある「スミルノフ陸軍大臣」はヴラジーミル・スホムリノフ陸相（1848～1926，在職1909～1915），5枚目の「太平組合」は「泰平組合」のことであろう。

二回目の提言は，第一次世界大戦で苦戦するロシア軍の加勢として，日本軍から砲兵を派遣すべきという趣旨で，革命の直前に送ったという。東京大学法学部法政史料センターの所蔵する荒木貞夫関係文書には，「時局に際し帝国の対露方策」（大正6年8月1日付け，I–52）という文書が含

まれており，これを指している可能性が大きいが，その趣旨は，荒木がこの対談で語ったこととやや異なるように思われる。

すなわち「対露方策」においては，ロシア側に日本軍の出動の「渇望」が見られるとしつつ，「帝国［日本のこと］の対露策は，露国を自家薬籠中のものとし之を指導して永く帝国の友邦とし以て極東永遠の平和を樹立し，帝国の東洋政策に再び制肘を受けることなきを以て上策と」すると述べ，具体的な方策としては「此期に際して中堅人物の輿望に副い露国救済に第一歩を進め現状転換の動機を与ふるの策に出るを要す」として，軍隊の派遣や鉄道業務，さらには機関誌発行などの広報活動を通じて，日本のロシアに対する影響力を高めることを提言している。

この文書はまた「偶々此秋に際し米国の活躍目覚しきものあり（中略）露国の経済就中鉄道は米国の勢力下に入らんとするの勢いあり」と述べていて，鉄道技師ジョン・フランク・スチーヴンス（1853～1943）の使節団をはじめとする，アメリカのロシア支援への対抗を意識していたことが見て取れる。これが対談の方では，荒木はアメリカの要因について聞かれて，否定的な話をしている。

それに続く第三の「提言」は十月革命の直前だったという。時期的に見て，東京大学法政資料センター所蔵荒木貞夫関係文書の「時局の推移に就て私見を具す」（大正6年10月15日付け，I–53）がこれに相当すると考えられる。この文書は，ロシアの戦争継続が困難になりつつある状況を指摘し，それを踏まえて今後のロシアの状況と協商国の対露政策を予想する。ここで荒木は，ロシアの戦争継続が困難になり混乱状態に陥ると，「所謂「何等かの処置」の使命は先ず第一に帝国と米国の上に落つるものと考えざるべからず」という。ここで日本はどう対応すべきかであるが，「協商列国の提議に対し経済産業上の見地よりする各種利権に関する世論の意嚮を示すは兎も角苟も領土的野心の徴候を示すが如きは徒に列国の疑心を増し将来の国策に一大障碍を胎すべしと信ず」と述べるものの，世界の大勢を観察しつつ積極策を取るようにというところで終わっていて，実際にどのような政策を行うべきか，具体的な内容にはあまり踏み込んでいない。

さて，ロシアではこの時期すでに1917年の二月革命によって帝政が倒れ，さらに十月革命によってボリシェヴィキ政権が誕生した。新政権

はドイツ，オーストリアなど中央同盟国との単独講和を模索し，1918年3月，ブレスト・リトフスク条約を結んで休戦することになる。

一方，日本ではこの頃，陸軍を中心にシベリア出兵計画の策定が進められていた。1918年1月上旬，荒木は同じく観戦武官として派遣されていた黒木親慶陸軍歩兵大尉（1883～1934）や石坂善次郎駐露陸軍武官・陸軍少将（1871～1949），駐露大使館の芦田均書記官（1887～1959）らとともにペトログラードを発ち，シベリア鉄道経由で帰国の途についた。途中のハルビンで，荒木は中島正武陸軍少将（1870～1931）の指揮下に入り，現地工作に従事することになる。主な相手は中東鉄道の実権を握るドミトリー・ホルヴァート中東鉄道管理局長（1858～1937）と，ザバイカルで反ボリシェヴィキ運動の旗を掲げたグリゴリー・セミョーノフ（1890～1946）である。なお，このころ荒木が参謀本部に送った報告文書が，「ホルヴァット援助により得たる利権等に関する件」として，『日本外交文書』に収録されている（1918年4月21日付け，大正7年第1冊771～785頁）。また，ハルビンを中心に展開された工作のあらましについては，原暉之の著書，特にその第10章「特別満州里支隊」と，バールィシェフの2019年論文を参照されたい。

ちょうど寺内内閣の外相が本野一郎から後藤新平に交代した直の4月下旬，荒木は東京に呼ばれて現地の状況を報告した。

このころの荒木の活動状況を示すのが，防衛省防衛研究所の所蔵するファイル「戦役―西伯利出兵－31　西伯利出兵に関する往復書簡綴　荒木貞夫陸軍大佐」である（なお当時の荒木の階級は陸軍歩兵中佐で，1918年7月に大佐に進級した）。

この綴りに収められた1918年4月26日付け荒木発中島宛書簡には，「［寺内］首相，田中［義一参謀］次長，［大島健一］陸相，［勝田主計］蔵相，［後藤新平］新外相に対し情況申述置候」とあり，一中佐の身にして政府首脳部と面会し，対談したことを伝えている。（荒木は「対談記録」で，寺内首相とは面会していないとしている［No.42］が，記憶違いか。）

荒木は，この書簡で，ホルヴァートの支援策について軍中央部と協議した結果を報告し，さらに4月28日付け，同30日付け，5月6日付けおよび同16日付けの中島正武・武藤信義（1868～1933）宛書簡において，その後の折衝経過を続報している。

東京滞在中に荒木は「与国最近の態度並東清鉄道新理事局組織以後の形勢に鑑み速に帝国極東対策の決定を切言す」(1918年5月10日付け)という文書をまとめた(東京大学法学部法政史料センター「荒木貞夫関係文書」(I–69))。荒木はここでアメリカの対露政策および極東進出に対する危機感を強調する。すなわち,「現「ホルワット」一味は親英米派なり,旧西伯利政府員は親米派なり,「ホルワット」の交通長官は親米派の錚々たるものなり,在極東猶太人は親独米派なり,過激派は親米主義なり英仏は大体に於て少くも現時は米国信頼派なり,唯一親日派にして実力を有する「セメノフ」は今英国の制肘によりて窮境にあり」と情勢を整理し,「既に時機を失したる現勢は,「セメノフ」と「ホルワット」の両立を許さず,何れか屈せしめざるべからず」と論じる。また,「今日に於ては極東に於て仮令国際軍を起すとしても到底日米の間に利害の一致を見ること能わざるべし。故に国際軍編成の場合に於ても帝国は主導となりその自衛の目的を主眼とせざるべからず」とも述べている。ここから引き出されるのはセミョーノフへの支援集中であり,「与国に通牒を発したる後必ずしもその正式の回答を待つことなく作戦計画に基き直ちに一部の行動を開始す。」「日支軍事協定の締結を促進す。」「「セメノフ」軍に帝国軍の一部を加えて速に後貝加爾[ザバイカル]を占領し,仝時に沿黒竜哥薩克と共に沿黒竜州の軍事占領を開始す」ことなどを提言している。

前記防衛研究所のファイルにある,荒木の5月16日付け書簡の末尾には,「来週初当地発帰任可仕」とあり,その通りとすると,荒木は5月20日過ぎころ東京を発ちハルビンに戻ったことになる。

荒木の口述記録によると,この後荒木は北満一帯の視察を行い,6月25日にハルビンに戻ったという。この少し前,1918年6月14日にハルビン特務機関長は中島から武藤に交代した。

6月29日,ウラジオストクでミハイル・ヂーチェリヒス(1874～1937)の率いるチェコスロヴァキア軍団がソヴィエト政権を打倒し,ピョートル・ヂェルベル(1883～1938)を首班とする自治シベリア臨時政府が権力掌握を宣言する。これを見たホルヴァートは,荒木たちの支援のもと中東鉄道を東進し,7月9日,中露国境の町グロデコヴォで実務内閣政府の成立を宣言するが,チェコスロヴァキア軍団によってそれ

以上の進出を阻止された。荒木たちは，ホルヴァートを擁立しながら顔を潰された形になった。口述記録には，この時荒木がウラジオストクに駐在の加藤寛治第五戦隊司令官・海軍少将（1870 ～ 1939）や，参謀本部員の坂部十寸穂陸軍中佐（1877 ～ 1930）と行った折衝についての回顧談を見ることができる。

こうして沿海州にはウラジオストクの自治シベリア臨時政府とグロデコヴォの実務内閣が一時共存することになった。その解決は出兵開始後の 9 月，シベリア臨時政府首班ピョートル・ヴォロゴツキー（1863 ～ 1925）の極東訪問によることになる。

8 月に連合国の共同でシベリア出兵が開始された。この時，中島は浦潮派遣軍参謀長に就く。そして 9 月には，武藤がザバイカルに進出した第三師団付として，イルクーツクに派遣される。日本では寺内内閣が倒れて原敬内閣に交代し，田中義一が陸相に就任することになった。

このころの荒木について，東京大学法学部法政史料センター所蔵荒木貞夫関係文書には，1918 年 10 月 9 日付けの文書「露国極東諸機関指導要領」が収録されている。ここで荒木は，出兵によって極東からボリシェヴィキ政権が一掃された情況において，極東に日本の影響下の政権をつくることを提言する。

荒木は文書を次のように書き起こす。「従来直接間接に帝国支援の下に組織若くは編成せされたる極東露国の政治，軍部諸団体竝に正に施設の緒に就かんとしつつある経済諸機関を統合合致せしめ之を先ず極東（後貝加爾州以東）露国交渉団体とし逐次列国と共に之か承認に努力し茲に完全なる極東の自治団体を成立せしめ之が指導誘掖して一方完全なる露国復興の基幹とし他方帝国極東経営の階梯と為すにあり。

此の間後貝加爾州のみは極東自治体内にあると共に自治的特権を保持して将来極東の形勢変転する場合に於ては之を分離独立せしめて飽迄同州を帝国指導の下に置く用意を要す。而して以上極東自治団を如何なる形式を以て将来成立すべき完全なる露国中央政府に合せしむべきやは一に其の当時の形勢に依るものとす。」以上の構想は，ハルビンに着任以来の荒木の構想の発展形ということができる。

この少し後，荒木は 11 月 1 日付けで浦潮派遣軍参謀に異動となった（異動日付は下記「職員表」による。富田は 2018 年論文 162 頁で 1919 年 2 月 25 日

付で異動とするが，確認できなかった)。この直後の 11 月 11 日，ドイツで革命が起こって第一次世界大戦が終結する。その 1 週間後の 11 月 18 日，西シベリアのオムスクで政変が生じて，アレクサンドル・コルチャーク（1874 ～ 1920）を最高執政官にかついで全国政府を標榜する政権が成立する。コルチャーク政権は，ウラル以東のロシア白系政権を統合することになり，ホルヴァートやセミョーノフも政権の一翼としてそこに組み込まれることになった。

口述記録で荒木は，この後で「高橋少佐」と一緒に意見書をまとめて提出したと述べている。時期を明記していないが，当時参謀本部第二部長が高柳保太郎だったと述べているので，ウラジオストクに着任した 1918 年 11 月以後 1919 年 1 月前半までの間と思われる。高橋少佐は，高橋捨次郎砲兵少佐（校註 40 参照）であろう。

口述記録は，このあと，少し時期を戻してセミョーノフに対する援助と，日本人義勇兵による「日の丸大隊」，そしてセミョーノフのところに派遣された黒木大尉の思い出話に移り，それが終わると張作霖，次いでイヴァン・カルムィコフ，コルチャークとセミョーノフの関係の話に入って，途中で終わったような形になる。

1918 年 12 月 12 日，コルチャークと袂を別って来日途中のヴァシーリー・ボルディレフ陸軍中将は，ウラジオストクに入りると早々に荒木と面会した。ボルディレフによると，この時荒木は兵士 1 万人分の武器と装備品を提供できると話したというが，「談話記録」にも，その他の荒木の評伝にもボルディレフのことは登場しない。

どうやらボルディレフはこの後 1920 年初めまで 1 年余りの日本滞在中に，危険分子に近いと見なされるなったらしく，そのことが影響しているかも知れない。

荒木は，1919 年 7 月 25 日付けで浦潮派遣軍司令部から，熊本の歩兵第 23 連隊長に転出した。後任には井染禄朗陸軍歩兵中佐が発令された。

荒木貞夫の評伝としては，橘川学『秘録陸軍裏面史 将軍荒木の七十年』（上巻大和書房，1949 年，下巻 荒木貞夫将軍伝記編纂刊行会，1955 年）および有竹修二編『荒木貞夫風雲三十年』（芙蓉書房，1975 年）がある。後者は，巻末の「編者のことば」によると，1955 年夏から晩秋にかけて狛江の荒木邸で聞き取った話が，戦後一時再建された『時事新報』に連載され，

それを本にしたものという。一方，本口述記録は，1957 年 10 月に狛江の荒木邸で聞き取ったものを荒木に示し，加筆・添削を受けたものという。内容的には前記風雲三十年とほとんど重複しない。インタビュアが誰だったかにもよるが，想像するに荒木は，時事新報連載記事の続編的な意味合いで語ったのではなかろうか。また，「この前閣下からお伺いしたわけです」［No.32］という文面から，記録はこれで 1 回で完結するものでなく，少なくとも前回があるらしいと想像される。

シベリア出兵は，多数の陸軍関係者が関与して展開され，回想録や日記，書簡などがいろいろな形で世に出ている。どういうものがあるか概観するには，麻田雅文『シベリア出兵』巻末の文献目録が便利である。

ただしこうした記録・史料はいずれも断片的なものであり，出兵の全体を見渡すことはなかなか難しい。出兵の最初から最後まで第一線で関わり続けた人物はいないうえ，出兵に関わる活動には表にできない部分が多々あり，その後はっきりした「成果」あげることなく終わったことで，関係者の史料・回想の出版においても，シベリア出兵に関係する部分はしばしば除外されたり，継子扱いされる状況があるように思われる。

荒木は，ロシア通の陸軍将校としてのキャリアを進み，ロシア駐在観戦武官から転じて，出兵開始の少し前からハルビンとウラジオストクを中心に，セミョーノフやホルヴァートなどに対する現地工作･援助を担った。そして，出兵開始から 1 年になろうというところで，現地を離れた。

今回公開する口述記録は，そのころの思い出の一端を述べたものに過ぎないとも言えるが，荒木の軍人としての性格や発想を窺う上で興味深く，また，現在に残された荒木の文書その他の史料と突き合わせることで，シベリア出兵という複雑で難解なパズルのピースをいくつか得られるもののように思われる。

［付記］　本解説作成にあたり，北海道大学大学院文学院修士課程の鈴木良昌と三浦一将の両氏には，防衛研究所所蔵史料の読解に多大な協力をいただいた。ここに謝意を表したい。

参考文献

麻田雅文『シベリア出兵：近代日本の忘れられた七年戦争』，中央公論新社，2016 年。

有竹修二編『荒木貞夫風雲三十年』，芙蓉書房，1975 年，

外務省編『日本外交文書』大正 7 年第 1 冊，外務省，1968 年。

北岡伸一『官僚制としての日本陸軍』，筑摩書房，2012 年。

橘川学『秘録陸軍裏面史：将軍荒木の七十年』上巻　大和書房，1949 年，下巻　荒木貞夫将軍伝記編纂刊行会，1955 年。

参謀本部編『西伯利出兵史』上・中・下巻　復刻版，新時代社，1972 年。

富田武「荒木貞夫のソ連観とソ連の対日政策」,『成蹊法学』67 号（2008 年），pp. 15–65。

Tomita,Takeshi. General Araki Reconsidered: His Views on Russia and Warfare duringWorld War I and the Siberian Intervention. "*Russia's Great War and Revolution in the Far East: Re-imaging the Northeast Asian Theater, 1914–22*" (Edited by D. Wolff, Yokote Shinji, W. Sunderland) Bloomington : Slavica, 2018. pp. 153–173.

原暉之『シベリア出兵：革命と干渉 1917–1922』，筑摩書房，1989 年。

バールィシェフ, エドワルド「1914 年～ 18 年の「欧州大戦」と大倉組の「対露時局商売」」，『軍事史学』50 巻 3 / 4 号，2015 年。

バールィシェフ，エドワルド「反ボリシェヴィキ諸勢力の内戦闘争と日本の軍事的な支援（1918 ～ 1922 年）」，『ロシア史研究』103 号，2019 年。

Болдырев, В. Г. Директория, Колчак, интервенты: воспоминания (из цикла "шесть лет" 1917–1922 г.г.) Новониколаевск, 1925.